



とさるふ

—日本生まれ変わりの基本構想—

赤松民男／福丸孝之

佐藤眞生

(縄文直観塾)

はじめに

4

一、むごたらしい傷跡

6

二、天災と人災が教えてくれたこと

15

三、必要なのは復旧や復興ではない

23

四、自給都市圏構想

32

五、食の自給

46

六、政治の自給

70

七、経済の自給——三つの経済——

84

八、エネルギーの自給

96

あとがき

110

著者略歴

112

はじめに

東日本大震災は多くの人々をいたたまれない気持ちにさせ、何かをしなければならぬと思わせた。

現地へ救援に赴く人、義援金を送る人、物資を届ける人、自分の職業を通じて勇気づけようとする人、何もできないと嘆く人、みんなそれはそれで意味がある。

しかし、本当に大切なことは、地震と津波と原発の災禍を、他人事ではなく自分の問題として受け容れることではないか。そして、その本質を問い、東日本だけでなく日本について、復旧や復興ではなく生まれ変わりを真摯に考えることではないか。

われわれは、災禍の直後からそういう問題意識で議論を重ねた。この災禍は、これまで通念だった考え方と仕組みをすべて否定した。だからこそ、日本全体の問題であり、生まれ変わりを構想する問題だと直観した。

生産最優先の都市、成長至上の経済、科学の盲信、誰からも精査されない官僚、利権政治、代議制と多数決という民意と無縁な民主主義、人間をバラバラにする無縁社会、こういう考え方と仕組みが悉く否定された。

個人の幸せではなくみんなの幸いに絶対価値がある。それは大規模化ではなく顔が見えて、自分の役割がわかる適正規模でしか実現されない。生まれ育って、生涯を暮らし、死に場所でもある“ふるさと”を取り戻さなければならぬ。

ふるさとは、そこに住む人々が手仕事で自給している何かを持ち、自給を補い合うおすそわけがあり、共に暮らす地域を維持する共同作業が行なわれ、困ったときに助け合う仕組みがある。ふるさとは住む人々はむさばらない生き方を当たり前だと思っている。足るを知って生きている。

われわれは、“ふるさと”を取り戻すことこそ日本の生まれ変わりの基本だと考えている。ふるさとを取り戻すには、生かされている自然、魂と知恵を伝承する死者である祖先、そしてかつてのムラに象徴される生活共同体に学ばなければならない。

一、むごたらしい傷跡



二〇一二年三月十一日、東日本一帯を襲った地震と津波と原発の災害は、世界でも最大の規模だった。被害の実相は半年以上たっても確定していない。いまわかつていいる範囲でその傷跡をたどってみよう。

〔人・物の被害〕

① 死者 一五、八二五人

死因Ⅱ水死 九二・五%

圧死・損傷死 四・四%

火災・焼死 一・一%

不明 二・〇%

死者の年齢は、八十歳以上が二二%、七十代が二四%、六十代が一九%、六十歳以上で六五%を越えている。九歳以下と十代と二十代はそれぞれ四%以下である。

② 行方不明 三、八一九人

③ 避難者 七一、五七八人

避難者は、避難所住まいが四、五九六人、県外の仮設・公営・民間住宅住まいが四九、六七九人、県外の知人・親戚の住宅に住む人が一七、三〇三人である。

④ 建物全壊 一一八、六七八戸

半壊 一八二、七三五戸

一部破損 六〇三、七九四戸

⑤ 漁船 二二、〇〇〇隻以上

⑥ 漁港 三〇〇以上

⑦ 農地 二三、六〇〇 ha

⑧ 道路 三、五五九ヶ所損壊

⑨ 鉄道 一、一〇〇ヶ所損傷

⑩ 航空仙台／滑走路冠水・ターミナルビル破損、花巻

／一部破損

〔以上は二〇一二年十月十九日現在の被害〕

〔原発事故による被害〕

⑪ 福島第一原子力発電所事故は世界における最大規模



の原子力事故。国際原子力事故評価尺度によると最悪のレベル七（深刻な事故）。チェルノブイリと同じレベル。

○原発事故には、暴走事故（チェルノブイリ）と冷却材喪失ⅡLOCA事故（スリーマイル）と炉心溶融Ⅱメルトダウン事故（スリーマイル）がある。福島第一原子力発電所事故は、炉心溶融から水素爆発が引き起こされた事故である。

○原子炉容器の損傷で放射能が大量に漏れ出した。これは原発史上初めての事故である。漏洩量は三七京Bqととんでもない数値である。

○セシウム一三七の総量は広島原爆の一六八個分に当たる。

○食品・水道水・大気・海水・土壌の放射能汚染は最低でも向こう三〇年以上は続く。汚染の広がりは一九八六年四月のチェルノブイリの原発事故では半径三〇〇キロに及んでいる。そして、二五年後の今一六八の村が消えてしまった。

○人体に対する影響は、湿疹・鼻血・下痢・咳・喉の痛み・頭痛・熱・倦怠感・生理異常のほか、甲状腺癌・白血病・リンパ腫・骨髄障害・白内障・心不全などの発病リスクを高める。

○ある試算では一〇年間で二〇兆円の処理費用が必要という。

○これに風評やデマの被害が重なる。

○しかし、原発による被害の最たるものは向こう数百年にわたる未来の時間を奪ったことだ（内山節著「文明の災禍」）。そして、人間の原点であるふるさとを消したことだ。原発難民は少な

くとも一五万人に達する。

悲痛な声が聞こえてくる。

「受け継いだ田んぼが守るべき家の象徴だ。雛飾りが待つ故郷にみんなで帰りたい」

「放射能のある家に帰るとイラッとする」

「帰れぬふるさと、ここでどれだけ農業が続けられるだろう？」

「ふるさとの曲を聴いたら涙がとまらない」

「心の痛み」

「がんばろう」といわれて自殺したくなった人がある。「自分のできることで勇気を与える」という人に吐き気をもよおす人がある。「義捐金を送った」と言われても、すぐに役に立たないし、お金がどこでどうなるかわからないと冷めている。「日本はひとつ」なんて叫ばれても、そうは思えない。現場にいない者に被害を受けた人の心を推し量るなんて、とんでもないこと。黙ってうなずくしかない。だから、現場で真摯に事態を体感した人の報告を聞くのが最もふさわしい態度だと思う。そして、精一杯この事態を自分の中で受けとめることが大事だと思う。義捐金や現地で支援することもいい。しかし、日本の生まれ変わりを自分の問題として一所懸命考えることが一番大事だと思う。

佐野真一著「津波と原発」から本当の被害の姿を追ってみたい。

○無人の家から金目のモノを盗む、流された車からガソリンを抜き取る、まるで三途の川の渡

し賃のない亡者から衣服をはぎ取る奪衣婆ダツエバのようだ。

○どうせ、自分の家には戻れない。泥棒でもなんでも勝手に持って帰ってくれ。

○自宅にはもう帰れない。帰ったら逮捕されるかもしれないから……。

○原発の被害は北朝鮮と一緒に。どうしてもよくなった。それでも自分の墓に入れないのは悲しい。

○宮古市の山根正治さん、定置網の帝王といわれ、一人で年に一万トンの水揚げをしていた。

一隻一億五千万円の船を五隻も流された。「日本は食糧問題で全滅する」と嘆き、「船があつたら貸してくれ、売ってくれ」と声を絞る。

○恐怖のあまり発狂した人がいる。一夜にして頭が真っ白になった人がいる。

○津波で死んだ人の形相は溺鬼のようだった。

○津波を避けるため高台移転を問われ、「怖いけど離れたくない」が本音。

○足湯で足が温まるとたわいのない雑談になる。「でも、私の心は閉じている」。

○震災直後は亡くした身寄りの悲しみばかり。夏になって人を思いやる言葉が出る。その後は生き残った罪悪感に打ちひしがれる。

○牛や豚、鶏は残して避難するしかなかった。家畜だから人が世話をしなければ死んでしまう。原発事故でむごたらしい死に方をさせてしまった。慚愧で仕方がない。

○東電さまさま、不毛の地を富裕なマチにしてくれた。仕事もくれた。原発労働者が生まれ、原発銀座が栄え、原発ジプシーもやってきた。しかし、ふるさとは消えてしまった。

○各地をさまよい、その日暮らしの原発ジプシー、日当五万円に危険手当一〇万円、それでも被爆量が増えると即クビ、彼らの労働に唄も物語もない。精神まで去勢されている。

○政府も行政も、専門家面の学者も、事実を隠し、「安全だ、もうすぐ落ち着く」と嘘と隠蔽ばかり、信じられるものが消えうせた。

○テレビも新聞も、事実は伝えない。美談と「ガンバレ」だけ。危険区域が決まると一斉に退去してしまう。

○超科学の筈の原発が、バケツで水をかけ、オガクズと新聞紙で亀裂を埋めるなんて、嘆かわしい限りだ。科学なんて信じられない。

「文化伝承の断絶」

文化の伝承が断絶された。これがあつたなら救えた生命は多かった。佐野眞一著「津波と原発」ほかから拾ってみた

○大船渡に津波記念碑がある。「地震があつたら津波の用心、津波が来たら高い所へ」（明治二九年六月十五日）。

○陸前高田市には「津波と聞いたら欲をすててにげろ。低いところに家を建てるな」という石碑がある（NHK・課外授業／二〇一一年十一月十九日放送）。

○福島には「ここより下に家を建てるな」という石碑も残っている。

○日本文明は津波の襲来を予め自分の存立条件のひとつとして織り込んできた（中沢新一著「日本の大転換」）。

○防潮堤はいらない。「海に面して家を建てない」「海岸には作業納屋だけおく」というような教育が最も大切。

○日本には元々寄合民主主義があつた。陸前高田市の広田半島では集落が孤立したとき、手持ちの米を集めたら七〇kg、それを一人一日一合と決めて全員に分配した。

○津波の引き波は寄せ波の何倍も強い。明治の津波では、一八、〇〇〇人の死者が出たが、その内八、〇〇〇人は引き波で海に消えた。

○黙っていても見えてくる津波、どうやっても見えない放射能。津波には物語があり、被害者を高揚させ、饒舌にさせる。しかし、放射能に物語はない。人々は気持ちを萎えさせ、無口になり、内

陸前高田市



面まで汚染される。

○農業や漁業が壊滅し、それぞれ蓄積してきた手仕事の技が、後継者難も含めて消えようとしている。

○海の宝のありか、海底の根（岩礁帯）の位置、いつどんな魚がつくか。語り継がれた奥義、受け継がれる故郷がなくなった。

○牛・豚・鶏などが無残に放置されただけでなく、畜産業における長年の飼育の技も消えかかっている。

○東北には移民の村がたくさんある。その移民の里がなくなれば母村から継承してきたムラの文化そのものが消えてしまう。

○集落ごと、村ごとなくなるということは共同体の文化が消えることである。生まれて育ち、生活が続け、死に場所でもあるふるさとがなくなるのはその人の原点がなくなることだ。チェルノブイリではこの二十数年で一六八の村が消滅したという。今後三〇〇年は人間が住めない（朝日新聞・二〇一一年十一月二十三日朝刊）。

○ふるさと、なくなつたんだものね。あの地獄の日から遠くなっているのに、淋しさ、悲しさ、くやしさが反対に出てきている（宮城県石巻市雄勝町船越の漁師）。

○天皇が被災地を見舞うよりも、このような未曾有の大惨事なら改元するくらいの覚悟があつていい。

○専門家や学者は本質的に偏頗である。自分だけが最高の知識を持っていると過信している。そして何より自然に対する畏怖がない。

○マスコミは立ち入り禁止区域から真っ先に撤退する。事実を伝えないマスコミ主導の政治・経済・社会はこの大惨事に否定された。



石巻港近く

二、天災と人災が教えてくれたこと

五口止
矢

地震と津波は天災といわれ、原発は人災といわれる。本当だろうか。地震の規模や被害、津波が襲ってくる範囲を人間が科学という美名で想定して生活してきたとしたら、想定外の天災は人災になる。過去に津波がきた福島の山腹に「ここより下に家を建てるな」という石碑があった。「この教えを守っていたら津波に襲われずにすんだ」とテレビで嘆いていた老人がいた。

東日本大震災の大半は天災であり人災であった。ここから人間が学ばなければならないことは本質的なことだ。枝葉末節ではない。常識として疑わなかった価値観と、それを前提にした社会の仕事のすべてがひっくり返った。

① 都市は生産を最優先している。大小はあっても都市という都市は何らかの生産で特徴づけられている。自動車の豊田であり、造船の呉であり、鉄鋼の八幡である。

生産優先都市は何かの特化しているといえればいいように思うが、実際には偏頗である。自給できていない。自立していない。連携(ネットワーク)でつながっているとされる。国際化(グローバルイズム)で支えられているともされる。格好よく分業システムなどともいわれる。これが大

きなまやかしなのだ。特徴とされるものが駄目になったらそれでおしまいである。実に頼りない。そこに住む人々は生産優先の冠に振り回される。人々の物心両面の満足は生産優先都市では満たされない。都市が自給し自立していないということは、生産も、生態系も、人々の生活もみんなバラバラだということだ。このような都市は、何か事件や事故が起こったり、災害に合うと最も危うい存在になる。東日本大震災は、生身の人間の生活と無縁な生産優先の都市に無用という烙印を押した。

② 東日本大震災によって、金が金を生む経済が否定された。元々経済というのは経世済民といわれた。経世とは世を治めることだから政治のことである。済民とは民を救うことである。生活を安定させることである。これも政治である。つまり、経済は金儲けではない。人々の生活を安定させ、お互いに助け合う世の中の仕組をつくることである。それが、いつのころからか、経済が金になってしまった。金が金を生む仕組が経済になった。金持ちしか金を増やせない仕組になってしまった。株や金融、国の借金である国債に投資して儲ける。これが失敗する。そのため二〇一一年十月末、日本の国債は一〇三四兆円。国民一人当たり八一三万円も借金がある。アメリカも借金が嵩み、ドル紙幣をドンドン印刷している。ギリシャなどヨーロッパもみんな借金地獄である。

銀行が失敗したら税金で助ける。年金の運用はよその国の借金（国債）を買ってその金利に期待して回す。こんな実態のない金のまわし方がいつまでも続く筈がない。

こういう金だけの増殖経済が東日本大震災で否定された。人間にとって、自然も、生活も、文化もない経済は有害なだけでなく無効である。経済は政治であり、そこには自然と生活と文化が内包されている。

③ 現代人は科学を盲信している。目に見えないもの、証拠のないものは信用しない。すべて科学で証明されないと信じない。自然も制御したり、管理できると思っている。科学はその対象を細かく分ける（細分化）。そして、細分した分野を独立させる（専門化）。そこで証拠を集め、データをとって、理論を組む。ところが、部分を集めても全体はわからない。部分の理論が全体の理論にはならない。全体はいつまでもわからない。なぜなら、細かく分けた部分の全体における位置づけがない。そして、全体の中のそれぞれの部分同士の関係やつながりも不明である。だから、部分の集積が全体にならない。

自然科学者といわれていた今西錦司博士は一九八三年、



石巻警察署前

自然科学との決別を宣言し、自然学を提唱した。細分化し専門化した自然科学では自然の全体象を解明できない。自然を全体として解明する自然学が必要だという。そして、その方法論は直観であるという。

今西博士は、カゲロウの研究で棲み分けの理論を唱えた。ウマやサルで群れを研究した。他方、山岳家としてマナスル初登頂を成功させ、北部大興安嶺を縦断する学術探検も成功させた。そのような生き様を経て、突然変異は初めから方向性を持っている、同じ種の個体間に自然淘汰はない、生物は種全体が進化する、だから生物は変わるべくして変わると喝破するに至る。

科学というのは小さな点にすぎない。科学でわかることはほんの少しである。大半のことはわからない。にもかかわらず、科学の名でわからないことまで“想定”してしまう。東日本大震災では、地震や津波や原発事故の被害について行われていた想定は悉く裏切られた。科学万能主義は根底からひっくり返った。

④ 日本は官僚国家である。官僚による国家の統治が制度として確立したのは明治である。山県有朋は選挙で選ばれた政治家の力を骨抜きにする仕組として官僚制度を導入した。立憲政治の当初はなつてほしい人材を議員に推す仕組があり、議員も自由な意見を積極的に展開した。山県はこれでは国の運営ができないと考えたのであろう。

官僚は試験に合格した公務員だが、さらに有能な人材を登用する上級試験があり、資格任用

制度（キャリア制度）がある。エリートが選ばれ、專業制と服従制度の下で権限を細かく決められ任務を果たす。その人事に法的規制はなく、慣行で配属が決まり、固定化されている。政治家からも自立している。

官僚は政策と予算の権限を握っている。法案も議員立法は殆どなく官僚が起案する。指揮・監督・許認可の権限も持つ。企業に対する関与は自在である。

官僚統治は、政権党と結託しさえすれば楽に継続して行える。ここに、政策を裏付ける御用学者を利用した権威主義、不都合を国民に知らしめず隠す隠蔽主義、産業界への利権の保障とその返礼としての天下り、産業界からの広告投資によるマスコミの懐柔という構図が完成する。

東日本大震災は、この官僚統治の破綻をあからさまにした。官僚統治は政権もろとも、いまだに復旧についても復興についても処方箋を描けていない。まして、日本を生まれ変わらせる発想など思いもよらない。無能ぶりを晒す結果になった。

⑤ 東日本大震災は利権政治を真つ向から拒否した。

政党は今では理念もなければ、確固たる原型も持たない。原型とは精子と卵子が会って生命を育む基である。どの政党にも枝葉末節の党利党略しかない。人気取りの有象無象の集団である。ひとつの党にたくさん派閥があつて、一致団結することはない。他党に対するよりも、党内闘争が激しい。利権が絡むからだ。議員も利権で動くだけの政治屋である。議員になって

ほしい有為の人材は、政治屋になることを“落ちぶれた存在”と蔑視している。

どの政党が政権を取ろうと、誰が大臣になろうと、官僚はなめてかかる。国を動かしているのは官僚だと自惚れている。政治屋は官僚の作った台本通りに動く。演説も答弁も官僚の台本を読むだけである。この官僚にしても、政権党との表立った喧嘩は避ける。できるだけ利用する。

そんな政党に迎合しているのがマスコミである。政権が何年続くかではなく、とりあえず現政権に親密につきあう。政権党と官僚との癒着がある限り、今の利益につながると思っている。利権政治が困難辛苦に真つ向から立ち向かう筈はない。事実を隠蔽し、当たり障りのない言辞でごまかし、とにかく先延ばしする。東日本大震災で、政権党にも、野党にも、どの政治屋にも、何も解決できないことをわれわれは思い知らされた。

⑥ ウィンストン・チャーチルは「民主主義は最悪のものより少しよい政治制度にすぎない」と言った。

現代日本の民主主義は代議制と多数決だが、これが民意を代弁できなくなっている。民意がないがしろにされる姿を政策決定についてだけでもみてみよう。

議員が選ばれる選挙は、まず、政策が問われることが少ない。殆どが理念や原型のない受けを狙ったスローガンだ。次に、なってほしい候補者がいない。殆どが利権を求める候補者だ。そして、投票率が決定的に低い。五〇%以下の投票率が殆どだ。これは政策不在と候補者の魅

力のなさである。国民は選挙でしか政治に関与できない。殆どが無関心になる。政策決定には関与できない。政策決定を放棄した状態である。

多数決は議会のきまりになっている。これは党勢によつてはじめから決まってしまう。議論を尽くして超党派で採決が行われることはない。少数意見を尊重する決まりもない。国民は選挙が終われば議会の多数決を見ているしか手がない。

東日本大震災では、その後の対応について代議制も多数決もまったく機能しなかった。国も、府県も、市町村も、機能停止のまま国民を放置した。後手後手である。国民が自発的に組織を作り、政策を考え始めた。代議制と多数決という民主主義は完全に否定されている。

⑦ 日本では一九六五（昭和四〇）年を境にムラの生活共同体がなくなってしまった。若者がマチへ出てサラリーマンになってしまった。

それまでムラでは、自給自足の生活をし、贈答という習慣で自給自足を補い合い、結ゆいで貸し借りをして助け合い、講などを通じて金銭的な助け合いが行われていた。ムラという単位で、縁が結ばれていた。好き嫌いや喧嘩はあつても、顔が見える範囲で一人一人の役割がハッキリしていた。みんなの幸いの中に一人一人の幸せがあつた。

マチへ出た人々は、隣りに住む人と挨拶もせず、名前さえ知らずにすむ生活をした。自分だけのことを考え、自分が住む地域のことなどどうでもよかった。自分の力で生きていると思ひ

込み、自分の幸せだけを求めるようになった。無縁社会である。

東日本大震災はこの無縁社会を否定した。地震と津波から避難するときに、地域ごとにまとまっていたところは被害を最小に抑えている。二〇人前後で組をつくり、そのリーダーが避難誘導した地域があった。ここでは、寝たきりの病人も、車いすの障害者も、一人残らず山腹へ逃れたという。

その後の対応についても人々がまとまって話し合いを行っている地域がある。顔の見える地域のまとまりがやっぱり必要だということをわれわれは思い知らされた。



塩竈漁港

三、必要なのは復旧や復興ではない



これまで常識とされた価値観と、それを前提にした世の中の仕組が全部ひっくり返つたら、元へ戻すだけの復旧では間に合わない。新しい何かをつけ加えて復興するといってもダメだ。そっくり生まれ変わるしかない。これは一大事だ。これまでの価値観を削ぎ落とさなければならぬからだ。価値観を削ぎ落とすなんてなかなかできることではないから、もう間に合わないかもしれない。しかし、日本は東日本だけでなく、日本全体が生まれ変わるしかない。だから、われわれは、日本生まれ変わりの基本構想を計画したいと思っている。

① 生まれ変わりの基本構想

基本構想、聞きなれない言葉だと思う。いいかえると原型である。原型というのはもともとなる型である。例えば、洋服を作るときの型紙である。建物を建てるときの設計図である。映画づくりの脚本である。精子と卵子が出会って生命を育む基である。理想論ではない。現実離れた夢でもない。

○基本構想は理念によって導かれる。

理念は最高の考え方である。根本の基準である。それをとってしまつたら無になる本質である。

理念では生きていけないという人がいる。しかし、理念のない生き方は役に立たない。

理念で経営は成り立たないという人もいる。しかし、理念のない経営は悪である。ただの金儲けに過ぎない。

○基本構想によつて最終到達点（ゴール）が決まる。

われわれは日本の生まれ変わりの最終到達点を“みんなの幸い”におく。一人一人の幸せは、みんなの幸いの中にある。幸せが積み上げられて幸いがあるのではない。最初からみんなの幸いを実現しなければ個人の幸せはない。

○基本構想には、実現計画と、過程管理の計画が含まれる。

最終到達点へ向かう道筋を組むことが実現計画である。条件によつて複数の道筋が考えられる。計画を実現する過程を管理するための計画が必要になる。プロセス管理を通じて、予め組まれた変更の道筋が採用される。

実現計画、その過程管理、これらを繰り返しながら、基本構想は最終到達点へ向かう。

② 生まれ変わりの価値観

生まれ変わるためにわれわれは古い価値観を削ぎ落とす。新しい、本質的な価値観、われわ

れはこれを理念としたい。次の四つをとりあげる。

○“生かされて生きる”

人間は自分の力で生きているのではない。自然に、社会に、宇宙に、そして文化に生かされている。

人間は自然に生かされている。植物状態になつても、人間は呼吸をしている。細胞が血液を媒介に新陳代謝を繰り返している。太陽と水と空気と酸素がなければ、そして地球がなければ人間は生きていけない。

人間は元々個体ではない。共同体という社会がなければ生きていけない。夫婦があり、家庭があり、地域があり、職場があつてはじめて人間は生きていける。

人間は宇宙に生かされている。宇宙というときすぎるが、無意識である。この無意識が自律神経・ホルモン分泌・免疫という機能を自動的に調節している。また、氣や神仏の領域も宇宙といえる。

理性や意思や感情という人間が自覚できる心の働きを文化とすれば、人間は文化に生かされている。

生かされているという価値観を持てるなら、そこには生かされているものに対する役割意識が生まれる。生かされている故の役割自覚が芽生える。人間はその役割に生きるということになる。

○“自然に沿う”

自然は管理したり制御できるものではない。生き物はただただ自然に遵い、沿う生き方が正しい。自然に間違いはない。人間以外の動物にも、植物にも間違いはない。自然に沿う生き方をしているからである。自然界で唯一人間だけが間違いをおかす。自然に反する生き方をするからである。

自然に沿う生き方とは、まず、循環を断たないこと。自然はめぐりめぐって元へもどる。

次に、全体観を持つこと。自然はすべてがひとつである。全体の中に部分が位置を占め、部分の中に全体がある。自然は一体としての全体である。どんな小さなものでも、全体の中にキチンと位置づけられ、ほかのものとの関係がハッキリしている。孤立し、バラバラなものはない。

更に、直観に本質があると思うこと。形のあるもの、見えるもの、データのあるものはほんの少しである。形のないもの、見えないもの、データのないものが大半である。大半のものは直観でつかむしかない。本質は直観でしかわからない。直観に導かれない理論は間違っている。学問も、役所の分掌も、会社の部課も、細分化し専門化したものからは全体像が逃げていく。全体像は直観でとらえるしかない。

○“顔のわかる共同体で助け合う”

一九六五（昭和四〇）年までの日本にはムラがあり、そこには生活共同体があった。マチ

へ出た人々の間に生活共同体はない。生活共同体がなければ助け合いはない。そこにあるのは無縁と無視と無関心である。

しかし、人間は何らかの共同体、居場所がないと生きていけない。だから、そういうものを求める。マチにもさまざまな共同体が生まれる。例えば、使命共同体である。平和とか、反原発とか、まちづくりとか、難民支援とか、そういう使命で一致した共同体がある。あるいは趣味の共同体もある。写真や釣りや囲碁・将棋などの共同体である。さらには共通の病気や事故に遭遇した者同士の共同体もある。そこにもそれぞれ助け合いはある。

どんな共同体も基本は助け合いである。しかも、お互いの顔が見えて、役割がハッキリしている。

最も大切なのは生活共同体である。

「生活」は、居場所が明確であるから、顔が見える。お互いを生活の場面で理解し合える。それだけ助け合いは生活に密着している。おすそわけという贈答がある。調味料やら卵やらの貸し借りがある。町内の掃除や植木の剪定というような共同作業がある。火事、水害や地震などが起これば一緒にことに当たる。みんなの幸いは、実はこのような日常の生活の絆から生まれる。

生活共同体には「仕事」が入り込む。事業に失敗して借金ができても講のようなお金の助け合いがある。

生活共同体には生活と仕事が密着している。使命共同体には掲げたテーマの助け合いはあっても、生活と仕事は持ち込めない。持ち込まないのがきまりになっている。そこが違う。

○「祖先の魂と知恵に学ぶ」

死者としての祖先の存在は連綿たる歴史の伝承にある。祖先から学ぶべきことは生かされている魂であり、生きる知恵である。

一九九二年に執筆したまま眠っていた「学」というドラマ、脚本を倉本聰が仲代達矢に送ったのがきっかけで、二〇一二年元旦にテレビ放映された。まずは「学」という物語を紹介しよう。

ニューヨーク在住のエリート商社マンを両親に持つ十四歳の少年「学」は東京で一人暮らしをしている。学の唯一の友はパソコンである。ある日、近所の四歳になる少女・ユカが学のパソコンに悪戯をしている内にすべてのパソコン・データが削除されてしまう。学は思わず少女を突き飛ばし、死なせてしまう。そして、少女の遺体を段ボールに詰めてゴミ捨て場に遺棄する。

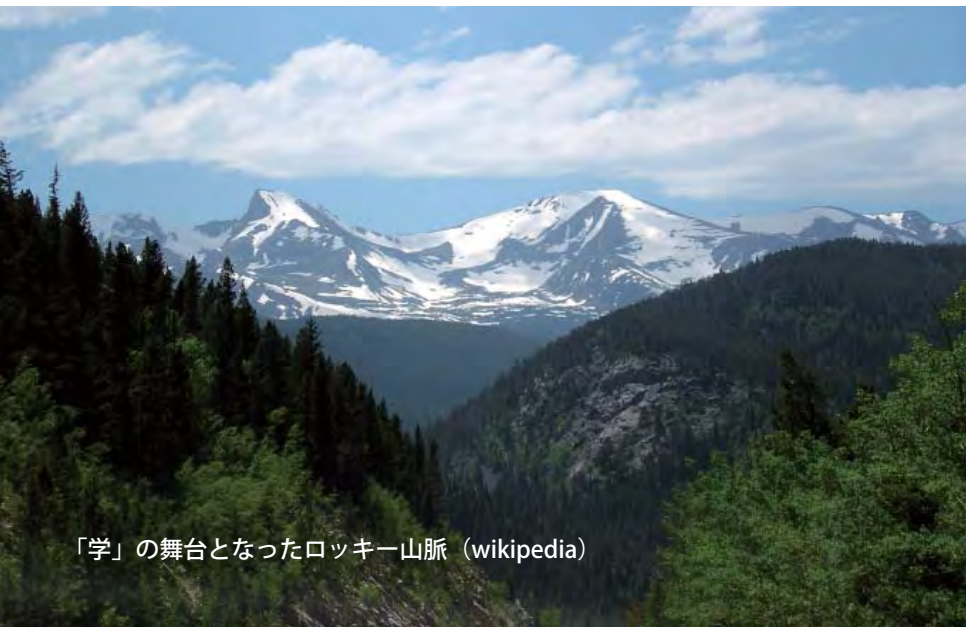
事件はすぐに発覚、マスコミ報道で大事件になる。学の両親はいたたまれず自殺をはかる。学はたった一人になってしまう。学は言葉を忘れ、誰とも口をきかなくなる。生きる気力さえもなくしてしまう。

その学を祖父母が引き取る。仲代達矢演ずる祖父の信一は元南極越冬隊員、しかし、末期

癌を患い余命は少ない。信一は、学に罪を乗り越えて生きる力を甦らせようと考える。信一は学を大雪山へ伴い、そこで一年間ともに暮らす。自然界で一人で生きる知識と術を教える。それでも学は一言も口を開かず、すべてを拒否し続ける。

信一は自分の教えが、耳は閉じていても学の心に染み込んでいると確信し、もっと大がかりで気違い沙汰と思われるような計画を一年かけて練る。カナダ・ロッキー山脈における学の生きる試練の行である。

信一はヘリコプターで学とロッキー山脈の深奥へ入り、「ここから歩いて帰る」といつて歩き出す。食糧は一週間分である。数日後、山の夕食をすませると「学、生きにゃなく。生きて愛さにゃ」と言い残し、信一は予定していた計画を実行する。学を山中にひとり残すべく、最



「学」の舞台となったロッキー山脈 (wikipedia)

後のモルヒネを注射し、ナイフで自ら命を絶つ。

翌朝信一の死を知った学は動転して喚き散らし、走りまわる。学は数日を無為に過ごす。信一の学宛の遺書。そこには、「人として生きる気があるなら村へ向かつて歩け。ムラは南西へ一八〇キロだ。生きのびるやり方は教えた」と書かれていた。もう一通、信一が妻かやに宛てた手紙には「学がこの手紙を届けてくれる。学と生きなさい。学を頼りにして」とあった。二つの手紙を読み学は生きる気力を取り戻す。

その後、学が最初にしたことは、ハゲワシに啄まれ、蛆虫がわく、変わり果てた信一の亡骸の埋葬だった。土を掘り、石を積んで、十字架を建てた。

手を合わせ葬礼をすませると、信一に教わった自然界を生きる術の基本である自分の位置の割出にかかった。北斗七星から北極星をたどり、進路を決めた。そうして黙々と人里を目指す。

食糧は既に尽きている。罌をかけて兎や鹿を獲り、蛇やトカゲを捕まえ、蜂や虫、野草を食べて飢えをしのぐ。ヒグマやグリズリーに出くわすが、そのたびに信一の教えに救われる。くじけてもうダメだとあきらめかけると、また信一が現れて助言し難を乗り越える。小鹿を捕えて食べた後で、学は小鹿の墓をつくる。そこへ自分が誤って死なせたユカが現れ、「お墓は小鹿だけ？」と問う。それから学は食糧にしたすべての生き物の墓を建てながら歩き続ける。そうして最後は溪谷の本流をたどって村に帰還する。

学は信一の葬礼を経て蘇生した。学は食糧にした生き物のすべてにも葬礼を尽くした。信一は学の心に魂を重ね合わせて学の再生をもたらした。学は生きる気力を取り戻し、大雪山での信一の伝授が知恵として蘇った。もし学が信一の葬礼をしていなかったならば、学はロッキ―で死んでいただろう。信一の魂も知恵も学を救えなかっただろう。

学は帰還の途上、何度も「助かってどうなるのか？」と自問する。信一は「それは改めて考えろ」という。学は自分で「日本に帰ってユカちゃんの家族に謝りたい。許してもらいたいのではなく、子供だからといって許されたくない」という結論を導く。

東日本大震災直後は合同葬儀だった。棺もなく、火葬もできず、縁ある人々の語らいもなかった。寺には、身元不明の無縁仏の遺体、避難中の遺族が預けた骨壺、津波で墓を洗われ流出した遺骨が散乱していた。

母親の遺体が見つかったとき、「よかったね」と声をかけられた娘は虚しさに絶句したという。震災による死者の弔いは終わっていない。日本生まれ変わりの基本構想は、震災の死者に対する葬礼が出発点になる。これなくして祖先の魂と知恵は得られない。

四、自給都市圏構想



①自給自足ってなに？

自給自足？

貧乏生活のこと？節約すること？地域経済を活性するための地産地消のこと？

いやいやどうも違う。そんな浅いものではない。

自給は自分でつくれるものはつくる、さらに自然から給^{タマ}わるものも含まれる。自分でつくるだけでなく、自然から感謝して授かるということも入っている。

自足は足りる、足るを知るである。自分でつくったものと、自然から授かったもので、謙虚に感謝して満足することである。

二〇世紀前半までは、世界の大部分の地域では食糧とエネルギーを自給していた。古代スパルタや現代のブータンは貿易をせずに自給自足している。イヌイットは今でも完全自給自足である。

戦前の日本でも食糧は勿論のこと、エネルギーの七〇%を自給自足していた。家でもムラでも

自給自足は当たり前だった。自給できないモノや現金が必要なときは近くのマチへ稼ぎに出た。

昭和四〇（一九六五）年まで、人々は仕事と稼ぎを分けていた。

「仕事」はムラのいろんな関係を維持し再生産する労働だった。道普請や山仕事や祭りや講などである。

「稼ぎ」は金を手にするための労働だった。車を買ったり、借金を返すための出稼ぎである。

かつて基本的な生活物資と資源はムラで自給するのが常識だった。それは人間が自然に沿って暮らし、ムラの中で役割を果たしながら暮らしていたからだ。

○食べ物や水、薪や炭などの資源は自分でつくり、自然にあるものを利用した。

○自分でつくりたくないもの、手に入らないものは、ムラの人たちがおすそわけで補い合った。誰かが相手の持つていないものをおすそわけすると、相手も持つていないものをお返しする。これは七〇八回続いたという。

○田植えや稲刈り、家の普請、荒れた道や山や川の手入れなどはムラの人々が助け合って一緒に行った。

○専門的な生活物資や道具はムラの得意な人や職人に頼んだ。

○結婚や葬式や祭りはムラ総出で一緒に行った。

○講があり、現金がいるときには融通し合った。

○車を買うとか、家の借金を返さなければならぬ場合には、近くのマチへ出稼ぎに出た。

○山上がりという仕組みがあった。借金などで家族が食べていけなくなったとき、「山へ上がる」と宣言する。誰の山へ入ってもいい。木や食べ物をどこで調達してもいい。親戚やムラの人々は十分な味噌を持たせる。家族が山で食いつないでいる間、山上がりした家の主はマチへ出稼ぎに行く。大体一年ほどで必要な金を稼いでムラへ戻り、元の生活ができたという。市場経済の危機をムラという生活共同体が救う仕組である。

五〇年くらい前、農村や山村の暮らしの範囲は五キロ四方といわれた。マチへ出て稼いだり、ムラにないものを調達する場合にはもつと広域の地域と交易していた。「自給自足」と「助け合い」と「交換価値としての貨幣」が一体になっていた。これをバランスのとれた三つの経済という人もいる。

自給自足は、ムラの一員として自然と一体になった生活様式だった。

昭和四〇（一九六五）年を境に進んだ近代化は、自給自足を否定した。若者がマチへ出てサラリーマンになった。ムラは機能しなくなった。自給自足ができなくなり、助け合いもなくなった。人間が単なるバラバラの個人になり、金で全てを賄うようになった。近代化は自給自足を否定し、解体した。

自給自足というのは、今にして考えると近代化の反対原理だということがわかる。自給自足は、

近代化によって人間が失ってしまった自然に沿う暮らし、ムラという生活共同体の助け合い、バラバラの個に解体されて自分がわからなくなっている人間を回復する思想なのだ。

自給自足は循環そのものだ。自然が循環し、人間関係が循環する。人間は共同体の中で役割をもって暮らす存在なのだ。自然と人間との相互関係の中にはじめて単なる個人、バラバラの個人ではなくなる。顔の見えるムラのような規模にいないと、人間は自分の役割を自覚できない。自分の役割が見えなくなると、自然の意味も見えなくなる。

自給自足は生かされて生きるということだ。自然に生かされ、ムラの中でお互い様で支え合う暮らしである。人間はバラバラの個人に分解されると、大きな役割を背負えなくなる。間違った社会の原理を覆すことなどとてもできない。

地域における自給自足なしに、風土に根ざした文化はない。地域や人間関係の多様性もない。都市生活は、自然と人間が一体だったこと、どんな歴史をたどって今ここにいるかという人間の原点を見失わせる。それは、地域、ムラの歴史を学べばわかる。

②現代の都市

現代の都市は、何かが起こると真っ先に危機に陥る。地震・津波・原発事故などで最悪の事態に直面したとき、生産と生活が半分になっても、そこに住む人々の生存を可能にする機能を

持つていない。都市が自給自足できていない、自立してないからだ。

○現代の都市は生産優先になっている。生産活動の場である。しかも、特定のモノしか生産していない。当然、人間生活の全部を支える生活物資も道具も揃わない。都市で人間の生活は成り立たない。

○都市を仕事場にする人々は会社の仕事を自分の人生だと錯覚する。「オレから仕事をとったら何も残らない」と思っている。しかし、自分の生活と仕事には深い溝があるので、人々はストレスにさらされる。自分を失う。

○都市には生産機能のほかに、公共サービスや商業サービスや情報などのシステムの機能はある。しかし、都市の夜間人口は減ることはあっても増えない。それらのサービスには常に浮沈がつきまとう。

○都市の周辺にはベッドタウンという住宅街がある。妻と子が生活しているが、夫は寝に帰るだけである。子は父に「お父さん、今度いつ来るの？」などと詰問する。しかも、近隣とはつきあわないから、支え合いや助け合いもない。無縁地帯になっている。ベッドタウンにも家庭生活や地域共同体の温もりがあるとはいえない。

○農林漁業などの一次産業地帯は離れたところにある。山や川や海などの生態系も都市や住宅街とは別のところにある。

○どこにも自然と人間が一体になった場所がない。どこにも生活と文化が結ばれた場がない。

人間は自然と地域共同体から離れ、バラバラの個人になっている。経済と生活と文化もバラバラにされて、人間の心は荒廃するしかない。

③自給都市の原理

○都市は人間の集団生活の場である。

人間の集団生活は、自然と生活共同体が一体になっていてはじめて可能である。生活適地とはそういうものである。

衣食住が自給できること、エネルギーが自給できること。そして、自然の生態系が維持されていること。

風土の特徴を活かした産業や商業があり、風土に根ざした文化・教育・情報が自給されていなければならない。生活拠点として、顔が見え、役割を自覚できる共同体が原単位になっていなければならない。

○都市には人間が生活できる機能が揃っていないなければならない。

生活は生命を活かすことである。物心両面を満たさなければならない。その領域は、個人・家庭・地域・職場に及ぶ。この四つの領域において、多様な生活を満たす機能が揃っていることである。

○都市には適正規模がある。自給自足にも適正規模がある。

原単位としての生活共同体は、かつてのムラぐらいであろう。顔が見えて、役割が自覚できる規模である。大江氏の定義によると、近所つきあい・買物・散歩の範囲を「地区」という。さらに、一時間ぐらいの通勤・通学圏を「地域」、二、三時間ぐらいの範囲を「都市圏」、人口二〇〇～五〇〇万人を自給できる単位にくくって「地方圏」という。私は、この地区を“ふるさと共同体”と呼び、地方圏を“自給都市圏”とみたい。

○都市は縮小すべきものである。

都市は拡大すべきものではない。生産を増やし、雇用を増やし、人口を増やしてはいけない。適正規模を維持すべきである。むしろ縮小する方がいい。都市の拡大は自給の否定につながる。

○都市構造と社会構造を一体化する。

仮に、地区・地域・都市圏・地方圏（自給都市圏）という都市構造を設定するとして、そのそれぞれにおける食糧・エネルギーなどの自然系と、政治・経済・文化などの社会系システムを一体化しなければならない。それぞれの自給性を維持することが根本である。

○自給都市圏は同じ地勢構造でくくる。

現在の四七都道府県は、日本列島を縦断し、中央集中をはかっている。同じ地勢構造にはなっていない。

日本列島を横断し輪切りにすれば、地勢が同じになる。地勢は土地のありさまである。日

本海と太平洋を挟んで山脈が走り、海あり山あり川があり、平野もある。農林漁業がある。

そして緯度の差が個性を生む。緯度は赤道を〇度とし、北極と南極を九〇度に分けて北緯・南緯という。日本は赤道より北なので北緯である。太陽エネルギーの大きさは赤道付近を頂点として緯度が上がるほど低くなる。これによって地勢が同じでも緯度によって自然界に個性が生まれる。農林漁業の個性もここからくる。

ちなみに経度は本初子午線を〇度として、東西を一八〇度に分け東経・西経という。経度は地理的な要因だけで、天候とは無関係である。自然の産物に対する影響は少ない。

④全国二三自給都市圏構想（大江吉宣氏の構想）

大江吉宣氏が一九八四年に著した「自給都市論」によれば、日本は二三の自給都市圏に分けることができる。次のとおりである。以下は大江氏の著作を引用あるいは要約する。

道東、道北、道央、道南。

北東北、中東北、南東北。

東関東、西関東。

上信越、北陸。



東海。

北近畿、紀伊、西近畿。

東中国、西中国。

東四国、西四国。

北九州、中九州、南九州。

南西諸島。

大江氏は、日本列島を東西に横断し輪切りにする。日本海と山脈と太平洋をひとくくりにする。こうすれば同じ地勢構造になる。各自給都市圏は緯度が異なるので、自然・気候・産物・風土・文化に個性が出る。

自然（資源）系は、直径一五〇キロ、人口二〇〇～五〇〇万人でくくる。エネルギー・ポテンシャルとして、太陽・風力・水力・地熱・廃熱・廃棄物を取りあげる。

工業（製品）系は、直径三〇～五〇キロ、人口五〇万人でくくる。

そして、システム系は、一都市・一地域社会でくくる。

大江氏の自給都市圏は、中心に自然系をおき、周辺に農業・レクリエーション、外辺に工業・

商業・生活拠点を配する。

さらに大江氏は、都市構造は、自然・地形・風土・歴史という基礎的条件の上に、政治・経済・文化という社会的条件が重なって決まるとする。都市のゾーンは、山岳・自然、国立・国定公園、農業集積、工業集積、商業集積、漁業集積、空港、主要交通ネットワークというように構成される。

大江氏は、このような自給都市圏を構築すれば、次のことが満たされるという。

- 都市が有機体として自給機能を確認できる。
- 都市が集団的人間生活の場になる。
- 非常時に生産と生活を半分に落としても人々の生存が可能になる。
- 都市が自立し、就業機会が保証される。
- 自然と生活と生産と文化が調和し、独自の文化を持てる。
- 国内外の都市・地域と自由な交流・交易が可能となる。

自給都市圏構想図



大江吉宣 著「自給都市論」より抜粋

⑤ 自給都市圏構想実現の研究課題

大江氏の自給都市圏構想は、都市の基本構想としては秀逸である。ただ、現状に照らして将来改めて研究・分析しなければならない。しかし、その前に、日本には優れた先例がある。まず、それを更なる研究の踏台にしたい。

○藩と鎖国

藩は平安時代後期からあった。幕藩体制の初期については、一五九〇年（豊臣秀吉の全国統一の時）説と、一六〇三年（江戸幕府成立の時）説がある。どちらにしても、幕藩体制は大政奉還・廃藩置県（一八七一年）まで続く。

最高統治機関の幕府があり、その傘下に領地における独立統治機構としての藩があった。幕府が藩を統治する基本は米を年貢とする石高制におかれていた。総石高は三、〇〇〇万石で、その内訳は次のようになっていた。

大名領 二二五〇万石

幕府領 四〇〇万石

旗本知行領 三〇〇万石

寺社領

四〇万石

公家領

七万石

天皇禁裏御料

三万石

大名領は江戸の初期、樺太から琉球まで八一の国に四六六藩あった。江戸の末期には三〇〇藩前後、明治四（一八七二）年の廃藩置県の時期には三〇二藩だった。

幕藩体制の二七〇～二八〇年の間、藩は自給自足していた。幕府に取り潰された藩はあったが、債務はかかえていても自給自足がでずに破産した藩はなかった。

しかも、南蛮船入港禁止が行われた一六三九（寛永一六）年から、日米和親条約が締結された一八五四（嘉永七）年までの二一五年間は鎖国の時代だった。藩は幕府に年貢を納め、幕府の命ずる事業をこなしながら藩の経営を健全に進めていたことになる。この藩の自給自足の手法を研究しなければならない。

○廃藩置県

明治四（一八七二）年、廃藩置県が行われた。当初は藩がそのまま県に移行したので、三府三〇二県だった。以後三府は変わらず、五回統廃合があり、明治二二（一八八九）年に四三県になった。石高制は継続され、県の石高は九〇万石とされた。

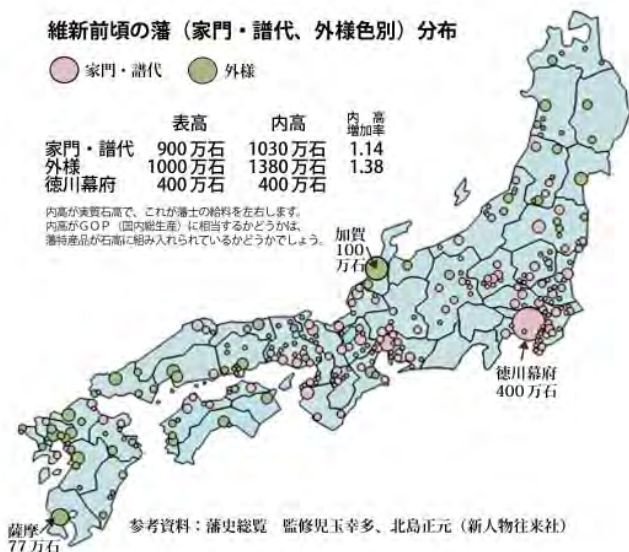
藩を県に移行させるのに一八年を要した。特に旧藩の債務の扱いが大変だった。明治政府

維新前頃の藩（家門・譜代、外様色別）分布

● 家門・譜代 ● 外様

	表高	内高	内高増加率
家門・譜代	900万石	1030万石	1.14
外様	1000万石	1380万石	1.38
徳川幕府	400万石	400万石	

内高が実質石高で、これが藩士の給料を左右します。
内高がGDP（国内総生産）に相当するかどうかは、
藩特産品が石高に組み入れられているかどうかでしょう。



参考資料：藩史総覧 監修児玉幸多、北島正元（新人物往來社）

はこれを三つに分けて対処した。

明治元（一八六八）年以降の債務↓年四%の公債、元金据置、二五年賦

弘文年間（一八四四〜一八四七）の債務↓無利息公債、五〇年賦

天保年間（一八三〇〜一八四四）以前の債務↓無効（一八四三年に棄損令）

藩を県に移行させた手法は、自給都市圏を構築する際に有効だと思われる。いまから研究しなければならぬ。

○井上ひさし著「吉里吉里人」

井上ひさしが著した「吉里吉里人」は、日本人の独立を宣言し、自給自足で抵抗運動を続ける東北の山村の物語である。ここから学ぶことは多い。

そして、この物語の舞台である東北の岩手県大槌町に同名の村がある。この村では震災後孤立状態にありながら秩序を守った避難所運営が行われている。物語にあるように独立心の強い人々が多数を占めている村である。

五、食の自給



① 現代社会の仕組みを変える

○原始のときから、人があったが故に、経済も（貨幣も）、政治も、宗教も、芸術も、道德も、人の為のものとして生まれてきたはずである。しかるに人間は高度化したと言いながら、政治があつて人の命があり幸せがあると勘違いしている。

○日本では世の中の仕組みの序列を無意識の中で、士、農、工、商と刷り込まれている。これは江戸時代の産物で、勿論、職業に貴賤はない。

○現代社会の、農^{のう}を恵^{けい}、士^しを政^{せい}、と読み替え順序を次のように再構築すべきである。

(1) 恵^{けい} 自然の恵みを享受し、一方でその恵みを育て、分ち、振舞える人。

(2) 商^{しょう} 人に対するサービスで人間社会を明るく楽しく支える人。金を貯めて人の為にそれを使う人。

(3) 工^{こう} 頭脳明晰にして科学（化学）技術を用い人間に便利で夢を与える「物」を作る人。

(4) 政^{せい} 人間性豊かにして、自分の損得はおかまいなく、知識経験を生かして、まつりごとをおさめ、ととのえる人（奉仕または公僕）。士も同じことができる。

② 農（恵）と食の自給とは何か

○農（恵）は命と生き方を決定づける人間の日々の生活そのものであり、業を超えた存在である。労働の中に、余暇があり、娯楽がある。自然の循環と人間の循環が共存している。

○農耕（恵耕）は効率を求めて大量生産、大量消費をするものではない。工業化すべきではない。増減なしのゼロベースで、自然を壊したり搾取するのではなく、自然「かまど竈の神・田の神・山の神」と一体でなければならない。

農（恵）は確かに人間が種を蒔いたり、耕したり、草を取ったりするが、育てているのはすべて火（日、太陽）、水（酸素）、土の3元素によるものである。

○農耕（恵耕）は百姓である。多職の民すなわち百の手仕事と百の夢があり、生き物への百のまなざしがある。魂を鍛える民である。そして一次産業として未来永劫変わらない作業と伝統と掟がある。

○そして農耕（恵耕）は自然・地域・家庭・人のかかわりの中で成り立っておりふるさとを決定づける。

○自給自足をして、はじめて足るを知ることができる。

○食は商品に非ず。命の糧であり、これまた商品を超え、職を超えた存在である。

○食が心と体を作る。完全無欠の栄養素を持った作物をおいしく食べることにより癒やされた心と健康な体が生まれる。身土不二である。自殺者三万人超一二年連続は、五割以上が健康問

題といわれる。「きれいな土から採れた作物、それを食した健康な体」と「病と医」は、密接にして裏腹の関係にある。

○食は文化そのもの。風土食がその土地の文化を育てる。

③食の自給自足が国のあり方の基本

○今の日本は自給率四〇％でも生きていけているがこれは真でも善でもない。

世界のグローバル化した資本主義経済圏の中にあつて幸い成り立っているに過ぎない。グローバルというのは言葉はいいが、世界標準を作つてその上で死ぬか生きるかの競争をしようという論理である。個人も国も自分のエゴと利得でしか動かなくなっているから力の強いもの、持てる条件が有利なもの、悪賢いものが勝つ。

○なぜ、人間は人間同士の極限の不幸と苦しみ（戦争と殺戮と貧困の格差）をもものともせず偽善を押し通し突き進むのか。

資本主義から派生した多くの経済システム、多数決民主主義の政治システムがもはやこの混沌の社会で制御もしくは機能しなくなつてきているからと考える。

○世の中において最も大切なものは「食べ物の充足」である。「食べることは生きること、生きすることは食べること」、自他ともにこれが満たされれば先ず醜い争いは起こらない。

これについて自然哲学者・岡田茂吉氏は二〇世紀を「真文明創造の世紀」と位置付け真文明

とは、「生命の安全が保障された真・善・美の完全世界^{まったくき}」と説いている。

○今回の「東日本大震災」による農林漁業における傷跡は甚大なものとなっている。

・農地の損壊では津波に次々と飲み込まれたり、地盤沈下が起こり海水が溜まったまま引かない農地が二三、六〇〇haに達した。

・ヨウ素一三一、セシウム一三七が基準値を超えて流出拡散した放射能汚染では水道水の取得制限（東京都をはじめ）、福島県産野菜や原乳の出荷制限が起こった。加えて風評被害がそこで住む人々の生活を破壊した。

・二〇km～五〇kmの避難区域に残された牛や豚や鶏や犬や猫が野良となって放置された風景は見るに堪えない惨状である。

・水産業では気仙沼で漁船は四％しか残らなかったし、沿岸の漁港及び二次加工工場はほぼ壊滅した。

・放射能汚染の海や山、居住地、田畑、工業地などすべてを除染することは不可能と同時に気が遠くなるような時間と手間と費用が掛かる。

○農林漁業の基盤を大きく損失した今こそ「食の自給自足を国の基本」に据え、生活のあり方を根本から変えなくてはならない。

④ 自給率一〇〇％は、やればできる日本

○なぜなら幕藩体制の江戸時代は約三〇〇の藩が自給自立していた。

その歴史を見てみよう。

(1) 飛鳥時代 唐の律令制度に学んで人民を「公地公民とし、班田收授法を断行した(六五二年＝白雉三)。大化の改新」である(聖徳太子の摂政から始まった)。

(2) 平安時代の荘園統治時代を経て安土桃山時代、羽柴秀吉の太閤検地により日本の農地制度の基礎が固まり、納税や地権や農地法のほとんどはその時代に生まれ現在に及んで生きている。

(3) 江戸後期の日本の国(藩)の財政を賄うものは石高であった。当時およそ三〇〇の藩は自給自足を成り立たせていたのだが、それをなし得ていたのは全国津々浦々に農に対する哲学者ともいえる先人達が百花繚乱のごとく輩出していたからである。

・農聖と言われた小西篤好(摂津国佐保村＝茨木市・一七六七～一八三七)は、佐保村の庄屋の家に生まれ、十五歳の時京都に出て一〇年間、儒学、国学を学んだ後、帰村して農産物の試験場を開き実際の農業の研究育成に没頭し、三〇余年の研究成果を「農業余話」上下二巻に著し、国学者、平田篤胤・篤真父子の校訂のもと一八二八年出版した。出版は世間から好評をもって迎えられ、江戸の戯作者・山東京山が草双紙(絵入りの読みもの)「豊年百姓



大阪府茨木市の泉原農園

鏡万作おどり」に著したことにより一世を風靡して、教えを乞う人々が多くなり、筑後柳川藩、肥後平戸藩、丹後宮津藩まで出向いて講習を行っている。篤好は、実生活の上でも佐保村の庄屋として村人をよく指導して土地の開発を積極的に進めたり、天保四年（一八三三）の大飢饉には私財を投げ出して村民の救済に尽力した。

「そもそも穀というものは、万人が天を仰いで頼りとするところ。これを得れば、生き、これを失えば死ぬ。金玉などどがよくて有り難いかわからぬ。世の中で貴いのはただ五穀のみ」と言い、百穀を成熟に至らしめ得ないことを憂いて、「農業余話」の一編をして世に問うたのである。

・むらたすえたけ村田季武（摂津国目垣村一七二一〜一七九〇）は、

目垣村の豪農の出で、学問にも秀で、一七六八年（明和五年）四十七歳の時、家を出て、私塾「えいかしやいん盈科書院」



大蔵永常胸像
日田市中央公民館所蔵

の塾生を維持するため泉原の大原山の西に、一町三反の「泉原新田」いずはらしんでんを開拓した。江戸中期、新田開発を奨励していた幕府は、三年間は無年貢とし、以後の一〇年間までは年貢率を低くして、小規模、小農民も開発に参加できるよう図っていたので村田季武はこれを用いた。

彼は漢書や史書・医書を多く所蔵し、これを無償で貸し出したり、彼自身、講義をして医学に詳しい塾生を育てて、村人の無料診療や施術に当たった経世済民の人である。

・宮崎安貞（筑前国福岡藩一六二三～一六九七）は、江戸前期の農学者で二十五歳の時、福岡藩に仕え、二〇〇石を給されるが、三十歳を過ぎて職を辞し筑前女原村に隠居し、農耕のかたわら農業技術の改良に努め、農民をよく指導し自らの経験と中国農書、本草書などをもとに「農業全書」全十一巻を発刊した。徳川光圀も読んだとされ、明治に至るまで最高の農書とされた。

・大蔵永常（三河国田原藩一七六九～一八五〇）は、宮崎安貞、佐藤信淵と共に三大農学者の一人。各地の農業を見聞し多くの農書を著し作物の普及に努め実際に農民の暮らしを助け豊かにした功績は大きい。「広益国産考」「農家益」「農具便利論」を書いた。

・佐藤信淵（出羽国一七六八～一八六一）は、江

戸後期の絶対主義的思想家であり、富国勸農・海防・兵学などを説いた経世家（経済学者）、農学者、兵学者、農政家である。

・二宮尊徳（相模国、足柄村、一七八七～一八五六、農村復興策を指導した農政家）に至って「報徳思想」をもって日本の農業立国を高々と掲げ今の日本のかたちを創った。

（4）その後世界に国を開いた明治政府は食糧増産と鉱工業振興による「富国強兵」を国策として強力に押し進め、瞬く間に欧米の列強に伍して覇権争いにも身を投ずる。特筆すべきは北海道の開拓である。明治の初頭から日本政府は総力を挙げ開拓団を送り込み艱難辛苦の連続の中で、今のあの美しい大地北海道を創造していったのである。強国特にロシアの浸食を許さないことと、一大農産地の確保を目標として、これを見事に成し遂げたのである。北海道がなければ今の日本のかたちは備わってはいない。国の宝である。

（5）昭和に入って太平洋戦争に敗れて、まさに“生まれ変わり日本”の復興が始まった。工業輸出産業（ソニー、ホンダ、トヨタ、松下ほか）、造船、繊維、更に日本列島改造の名のもと、建設業による高度成長を遂げ、GNP世界第二位の経済大国にのし上がった。しかし、その陰で農業については昭和三〇年を境に急激に衰退していったのはご存じの通りである。

⑤ もともと日本は自然大国であり、農林漁業豊かな国

○日本は地球上で地勢的に地震を抱えた怖い国である。しかし、四季の彩りに恵まれこれほど美しい国はない。有史以前も有史以後も「豊葦原瑞穂の国」であり、「海洋に浮かんだ漁豊かな国」なのである。（とよあしはるみずほ すなごり）

雄々しい緑の森、清らかな水、降り注ぐ太陽、青い海、どれを取ってみても日本の人口を養えるだけの循環する自然は用意されている。

○風光と共においしい食べ物と料理、おもてなしの心、礼節を尊び他を思いやる優しい文化は他の国々からも称賛をもって見られる観光立国でもある。

⑥ 日本には自給自足を実践し確立して「日本人の生き方」を体現している人がたくさんいる

○その一人は兵庫県朝来市の大森昌也さんである。「縄文百姓」を称号し「あーす農場」を開き、三世代の家族で自給自足生活をされている。

○鳥羽市の「扇芳閣（SENPOKAKU）オーナー谷口仙二氏」はホテル業そっこのけで、ホテルの七階を出入り口とする山腹を利用して一〇年前「めだかの学校」を開設した。

メダカがいなくなったことと、日本の少子化は同根と捉え政治、経済、環境問題を分りやすく展示している。五、〇〇〇匹のメダカが泳ぐビオトープの公園、循環可能な自然エネルギー、太陽光パネル・風車・水車のモデルを設置し音楽教室や体験学習室を設けて近隣の学校教育に

あーす農場



バイオガス装置



水力発電器



水力発電用引き込みホース



バイオガスのガスバーナー



バイオガスのガスタンク



大阪府茨木市の団居農園／休耕田を利用して野菜の栽培 著者佐藤眞生（左上）

供している。

国のかたちは「報徳思想」にあるとした二宮金次郎（尊徳）の銅像があり、経済門と道德門の二つを合わせもつて人間はそのど真ん中の正道を歩めという展示物がある。

ミキモト真珠の創業者御木本幸吉、豊田織機の発明者豊田佐吉の二人の偉人も展示してある。

○河内長野市と和泉市にまたがって、有機農業（自然農法）による生産を行い、それを直接、地域の消費者に届ける地産地消ネットワークの「お陽さまと耕す会」がある。会員の牛島美鈴さんは保育士もされていた方だが「これから育つ子供たちには、安全でおいしいものを食べさせたい」の一言ですと放射能汚染、農薬の害、化学肥料の害、多施肥の害を訴えながら、地域での輪を広げている。

○桜井市の川口由一さんは、五九年に及ぶ研究成果の不耕起を中心とする「自然農法」を確立。「赤目自然農塾」には全国から学びの人が馳せ参じ、「恵業（恵みの農業）」を、それぞれの郷土で実践されているのは、あまりにも有名である。

○このように、有機栽培を基本に地産地消を目指している農家、団体は、全国にたくさんある。

○フランスは「小規模の家族経営型」で一二〇%の自給を達成している国である。

・ブドウ園をはじめとする果樹園、野菜園、牧畜は安全で質の良いものを作る心のこもったやり方は各家庭で特徴がある。人々の幸いのための農業は家族農耕に勝るものはないと考えられて成り立っている。

2011年9月25日(日)午後9時00分～9時49分
総合テレビ

クニ子おばと不思議の森

自然・環境

■ 今なお秘境と言われる宮崎県椎葉村。その最深部の山奥に、今も夏になると山に火を放ち焼き畑を作る「おまじ」椎葉クニ子さん(87)が暮らしている。焼き畑と言っても南米や東南アジアの大規模開墾に使われている略率的な焼き畑ではない。毎年焼く場所を変えながら少しずつ耕作し、4年収穫したら放置して森に返す。そして30年周期で山全体を一巡する。それは森の豊かさを保つ営みであることを、かつては誰もが知っていた。年老いる前に切られた木々は、すぐに新たな芽を出し新たな循環が始まる。人が焼き「かく乱」することで、森は若返り、畑の作物だけでなく、山菜やきのこなどさまざまな恵みを生み出す。かつては日本中が森を再生するための焼き畑を行っていたが、今もそれを続けているのは椎葉クニ子さんただ一人だ。この山で暮らすため、代々伝えられた焼き畑用の「種」を守るため。クニ子おばは山の神に祈りを捧げて火を放ち、その恵みを日々の糧とする。草木や、土の中の生き物たちと同じように、人間が自然の循環の一部となって暮らす最後の風景がここにある。縄文以来続けられてきたという焼き畑の営みに込められた日本人の知恵を、椎葉の四季の映像と、特殊撮影を駆使して描く。



Keyword 番組キーワードピックアップ

<http://www.nhk.or.jp/special/onair/110925.html>
宮崎県椎葉村 椎葉クニ子さん 焼き畑

○「クニ子おばの焼畑物語」

(NHKスペシャルより)

～よみがえりの森・千年の村～

宮崎県椎葉村の椎葉クニ子八十七歳
平家の落人集落。子が六人、孫が一四人
曾孫を含めると総勢四五人になる。

・三〇年経った森を伐採し、焼き畑の場
所をつくる。樹は樹齢三〇年を過ぎる
と芽が出にくくなる。三〇年ごとに樹
を伐り、焼畑をする。縄文以来四千年
前から昭和二〇年代まで続いていた。

・焼畑の時期は八月。晴れのち雨、
無風の日を待つ。ヤマバトが群れて
鳴くと雨になる。雲が川下りすると
雨になる。

・焼畑は村中総出で手伝う。山の神に
祈り、手分けしてともに働く。何も

言わずに助け合う。手伝いのお返しには食事をふるまう。それが村のしきたりである。焼畑は火退し^{ヒツカ}焼きをする。山の斜面の上から火を入れる。約二時間、炎が風を呼び、煙が一所に集まり、天に昇って終わる。

きれいに焼けると、灰がチツソ・リン酸・カリを含んだ豊かな肥料になる。害虫もいなくなる。焼畑の表面は五〇〇度を超すが、土中五センチも潜ると熱はこない。カタツムリはそこで熱を避け、火が消えると動き出す。根や枯葉を食べ、丸い糞をする。丸い糞は植物が芽を出しやすい。カタツムリは土を耕し肥料をつくる。まだ土が熱い内に、ソバ種を蒔く。そしてホウキで灰をまぶす。ソバの種はひとこがりをするを目を覚まし、発芽する。そこへ雨が降る。ソバは八月に蒔き、三五日で開花し、秋には収穫できる。収穫まで最も早い植物である。

焼畑には、一年目にソバ、二年目にヒエとアワ・タラの芽も出る、三年目に小豆、四年目に大豆を蒔く。そして五年目に山に還す。すると、伐り株や焼け株から樹の芽が出てくる。シデやナラやクリが大きくなる。菌糸が死んだ植物を食べてナラタケなどのキノコになる。山は土が代替わりして若返る。そして三〇年おく。

森を焼き、森を生かし、森に生かされる。森は人を生かし、人は森を生かす。森が死ねば人は死ぬ。火と水と塩と焼畑で世渡りができる。お金は一銭もいらぬ。出産は医者も看護婦もいない村で自力でした。ここでは医者も看護婦もいない。ただ昔の人のいうとおりにすればいい。安産の戒めというのがあって、お腹の子を左右に転がしたり、寝るときは足を

伸ばさずに寝た。

・ソバは一株で、豊作のときは、三五〇粒くらいできる。不作の時は五〇粒くらいだが、手間は同じだけかかる。飢饉になっても飢えることはない。ソバを蓄えておくし、赤いイモゴ土をソバ粉に混ぜれば食糧になる。椎葉ではソバは打たない。ソバ粉にする。それをダングにして味噌で煮る。ワクド（蛙）汁である。ワクドとはソバのダングが煮えると蛙のようになるからである。その上、クニ子おばは食べることでできる植物を四〇〇種類も知っている。

・墓は樹の下にある。人は死ぬと樹になる。春に、御武者祭りという、平家が滅亡した日を忍ぶ祭りがあり、冬には神樂が行われる。夜を徹して行う祭りである。

こうして、椎葉では神と人と焼畑が支え合って生きている。六三年来の焼畑は変えられない農法である。焼畑を切らすと人も絶える。だから、毎年できのいいソバの種を残し、守っている。

⑦金さえあれば食べていけると考えるのは浅はかな生き方である

○自給することは、まっとうに生きること。体を使って頭を使って人間がやらねばならない大切なすべての働きを身につけることである。

- ・国土（大地の自然）を壊さないこと。自然の懷ふかみちで生きること。
- ・地域社会（ふるさと＝人々と自然）に根を張って生きること。
- ・文化を守り伝承していくこと。

- ・食の安全を守り、人を健康にすること。
- ・雇用をつくり、働く喜びを共有すること。
- ・周囲の人々の幸い、みんなの幸いがある、自分の幸せがある。

⑧ 里山保全農園構想

○日本の耕地は約四六七万ha。休耕田は四五万ha（うち減反ではない単純休耕は六六％）、その他の耕作放棄地は四二万ha、合わせておよそ八七万haの荒れ果てた遊休地がある。日本の人口一人当たりにして約六八 m^2 になる。

○全農地を国有化して「耕地」は專業耕作者に班田収受する。「休耕地と耕作放棄地」は自給人に貸与する。

○專業耕作者は直売所へ納品。自給人は「おすそわけ市」を実施、余剰は直売所へ。

○自給人への貸与。

(1) 区画最低規模を三〇〇坪とする。年使用料は一万円程度の格安にする。

・三〇〇坪は家族3人が野菜だけでも自給するのに、六〇品種程の野菜を、連作障害を避けながら輪作するとして、これ位が必要である。

(2) 契約期間は、家族が相続する限り永久賃借権とする。

・その理由は、土は一朝一夕にはできない。連作障害を避けるには四分類・四年で一回転しなければならない。農耕は継続がなければならない。

○契約内容。

(1) 貸借人は野菜・穀物などを耕作し自給する自給人とする。

・自然の摂理に沿い、自分自身の手で土を慈しみ、農産物を育て、それを命の糧とする生活を目指す。

・農薬や化学肥料を一切使わず、堆肥による有機栽培を行い、里山全体を保全する。里山保全のために竹林や樹林の剪定などの管理も行う。

(2) 自然に沿う生活を食生活に求め、地域に健康の輪を広げる。

(3) 地域社会の風習しきたりを尊重して、まちの融和と発展に加わる。

⑨ おすそわけ市

○おすそわけ市とは自給の余剰を顔の見える住民に販売する仕組みである。

○その展開は

(1) 自給人と住民が親しく直接契約する方式。

(2) 一般住民が直売所と契約する方式が考えられる。

○自給人と住民との直接契約はふるさと共同体、例えば、自治会などを軸にすすめる。週一程

度でおすそわけ市を開催するなどの展開である。

⑩ 平成の「結^{ゆい}と講」(自給人ふるさと)

○かつて、農村では農作業の「結(労働と心の助け合い)」が日常的に行われていた。この結は均等交換が原則であったから、馬を一日借りれば、馬を一日貸して返した。田植えや稲刈りをお互い手伝いあった。

○「講(お金の助け合い)」は頼母子講に代表されるように、仲間が金を出し合って困った人から先に助け合う仕組みである。

○自給人ふるさとにおける平成の結。

(1) 共同作業。

(2) 在来種の種^{たね}の自家採取やその育苗を融通し合う。

(3) 新しい農産加工品を育てる。

一次産業×二次産業×三次産業⇨六次産業になるという方程式がある。

生産だけに終わるのではなく、それを付加価値の高い加工品として流通から販売までを一貫して共同体の中で行う。

・例えば茨木は「蕎麦」を名産に育て、そばのおいしい名店街をつくることができる。
・寒天と小豆を作り「おしるこ・ぜんざい店」の町にする(高槻市田能の例)。

・JR但馬三江駅（豊岡）「ぼっばやおふくろ食堂（池上さん）」も小さいけれど一例といえる。
・ブルーベリーを育て観光農園とし生食のほかジャム工場をつくる。

・牛や山羊の放牧場を農業公園内につくる。ドッグランや犬猫病院も併設する。

○自給人ふるさとおける平成の講。

（１）農機具の共同購入

（２）種の共同購入

（３）自給人ふるさと専用のポイント券・・・例えば二時間単位の労役を一ポイントとし、これを自給人ふるさと内で交換できるようにする。

⑪ 家庭教育の基本「手仕事塾」構想

○保育園は子供を預かることはできても、親の替りはできない。子供が親を必要としている時に、親がいけないということは、子供は情緒不安で殺伐な心になる。子育てをしない親は人間としても成長できない。子育ては食と同じく、自給自足すべき最も大切なものである。

○手仕事とは、自分の手でモノをつくることである。

○親の農作業を子供が自分の意志で手伝うように仕向ける。

・親が時間や効率に追われず楽しく仕事をするることにより子供は自然に手伝うようになる。

○農作業の中に「子育てのカリキュラム」を組み込む。例えば、農作業をしながら、オシメをかえたり、



家族で手打ちうどん

食事をとらせたり、作業を遊びにしたり、仲間との接客などをカリキュラムとして組みあげる。

○農業は百の姓かばねといわれる。生きていくためのすべての業わざと心が、内包されている。つまり、百の手仕事は自ずと子供たちの魂を鍛える。

⑫ 自家採種

○「食料の自給」と「安全で健康な食生活」のために最も大切な「作物の種」が今や日本の農業の衰退を象徴するように、遺伝子組み換え種子の九〇％が外国企業に握られ、関連してその他の種子まで特許申請されて「知的財産権」で抑えられている。国内の種子も一部企業の寡占にゆだねられている。

・百姓が自家採種をしなくなって種屋から買うようになり、そして日本の種屋は手間暇かかるので外国へ採種を任せてしまう。種を外国に任せれば輸入になる。

野菜そのものの自給の前に種の自給がなくなる。

- ・外国産の種は一代交配種、一代限りである。その種を次に蒔いても親と同じものができないばかりか、発芽さえしないものが多いので毎年、買わなければならない。

- ・その上、遺伝子組換種子という厄介なものまである。例えば、除草剤に対する耐性のある遺伝子を野菜の種に組み込む。すると除草剤を使っても枯れたりはしないが、この除草剤耐性が雑草にも移って除草剤が効かなくなる。

- その土地土地の伝統の在来種こそ、身土不二の動物と人間の命にとって大切なものはない。

- 受け継がれてきた伝統の作物の種は、ふるさとしてある地域グループが自家採種して自給しなければならぬ。

- いま、日本には在来種保存会がいくつかできている。各地の在来種保存会と連携し、自分たちのふるさと共同体で、何を自家採種できるか決めて、自家採種の交換をすすめる。

- ・「ひょうごの在来種保存会（代表山根成人さん）」では、「丹波の黒大豆・山芋」「岩津ネギ」「姫路のエビイモ」「美方ワサビ」「穴栗三尺キュウリ」「春日大納言小豆」「武庫一寸空豆」「網干メロン」など、昔から受け継がれてきた作物を作っている人たちの協力を得て種の保存と普及を行っている。

- ・埼玉県飯能市の「野口種苗研究所（店主野口勲さん）」は、インターネットを通じた在来種の販売を手掛けている。扱う種は二〇〇種以上。客の大半は家庭菜園を営む人たちで、育て

た野菜から、自家採種する人が増えているという。

・兵庫県市川町の牛尾武博さんは、無農薬で約六〇種類の野菜を作っているが現在、「白ナス」「もち麦」「唐人菜」「マチコネギ」「改良した里芋・タケノコイモ」など一五種以上の作物の自家採種に取り組んでいる。

・「京都桂高校」の園芸部は、一二〇〇年の歴史を持つ京野菜の種を守り育てている。京と名のつく、桂ウリ、人参、辛味大根、水菜、みぶな、山科ナス、ホウレンソウなど、現在八種であるが、将来三〇種に増やす予定という。この活動で、先の「高校生の食のプロジェクト」全国大会において優勝した。

○遺伝子組み換え食品は作らず食べず輸入せず。一代限りの種は使わない。

⑬ 平成の班田収受

○農地法では農地を持つ者を農家としている。そして農家でなければ農地の貸し借りや売り買いができないことになっている。

○現在農地法に基づき農地を持っている専業農家、兼業農家であっても自給生産を行っていない人は農家とはいわない。

○都市部の人でも援農もしくは自給に参加している人を自給人と呼び農家とする。

○農地法を改正して、農家の定義を耕作者と改める。

○農地をすべて国有とし、平成の新班田収授を実施する。

・耕作者＝農家と定めた人には耕作を止めない限り農地を支給し、その子孫（親族）において耕作が継承されるときは永続するものとする。耕作をやめた者は明け渡して、次の者との組み換えを行う。

・支給の面積は大化の改新の当時は、男は二反、女は一・三三反であったが、これでは過少なので、これの二・五倍を単位とする。

○租庸調について。

・租（穀物・野菜・果物の現物）は収穫の五%を自治体の財源にする。

・調（繊維・海産物とその加工品・酒・塩の現物）は収穫物の五%を国の財源にする。

・庸は地域社会のために惜しみなく労働参画する（ボランティアもその一つ）。

⑭ 風土食再構築

○風土食とは、ふるさと（地域）に固有の一汁と二菜。ごはんと漬物があつて、汁ものとおかずが一品。ふるさと共同体に固有のおふくろの味である。

・その土地ならではの伝統伝承料理、母から子へ受け継がれるその家庭独自の味料理のことである。北海道の「ちゃんちゃん焼き」や「石狩鍋」、秋田の「きりたんぼ鍋」、富山の「ぶり大根」、愛知の「味噌煮込みうどん」、三重の「てこね寿司」、大阪の「きつねうどん」、京

都の「万願寺唐辛子とじゃこの炊いたん」、岡山の「ママカリ寿司」、福岡の「久留米ラーメン」、鹿児島「さつま汁」、沖縄の「ゴーヤチャンプル」など郷土料理のほか、家庭ごとの味のカレー、すき焼き、肉じゃが、水炊き、煮物を含めて風土食を豊かにする。

○風土食運動。各地の風土食をていねいに集め、出版する。

○おふくろの味伝承立法……フランスでは母から娘への伝承レシピが習慣になっている。農耕立国日本は母から娘へのレシピの伝承を義務化する法律があつていい。

○手作り料理一品運動を、ふるさと共同体単位で例年キャンペーン期間を設け実施する。それを手作り料理年鑑として毎年発行する。

○自給栽培一品運動

「我が家はこの野菜はスーパーで買わない。自分でつくる」という宣言をしてもらう。一品が原則だが、一年間続けることを考えると複数でもいい。ただし、三品種までとする。

自給栽培を宣言した家族には「種（苗）」と「土」と「プランター」と「栽培の手引書」を支給する。

庭やベランダやビルの屋上で栽培し、繰り返し使える野菜が必要なので、野菜の品種は予め次のように指定する。

チンゲンサイ・カイワレ大根・小蕪（アブラナ科）、ニガウリ（ウリ科）、レタス・サラダ菜（キク科）、ねぎ・ニラ・ワケギ（ユリ科）、ホーレンソウ（アカザ科）、シソ（シソ科）。

六、政治の自給

五口止
矢口止

① 政治は、その土地、地域、国に根ざすもの

政治は、その土地で暮らす人々の様々な想いや声を反映し、政治家（議員）が「民意をまとめ上げた公理の代表」（民意を汲み上げた公の代表者）として議論されなければならないはずだ。しかし、現在の政治家には住民の想いが届いているとは到底思えない。政治に対する不信や不満が極限まで高まり出口が依然として見えない。

その功罪は別にして近年では、小泉郵政民営化の名の下に小泉チルドレンが数多く誕生した。その後、もう自民党ではだめだと自民党政治に終止符を打つべく政権交代選挙だと日本中が湧きにわき、小沢ガールズなるものが数多く国会議員として誕生したが、政治の改革は一向に進む気配を見せず、更に悪くなっている。

国会議員には、選挙区事情などから落下傘と呼ばれる候補者がいる。これは、政党の選挙区の事情により、その土地と縁のない人物が候補者となることだ。小泉チルドレンや小沢ガールズを始め、現在の国政選挙においては、この落下傘と呼ばれる候補者が沢山いる。

これでは、その土地に根ざした人々の生の声や息遣いが届かないのも無理はない。

また、住民とはかけ離れた論理で動くのが政治の世界であり、政党助成金目当てとも取れる新党が立ち上がったては分裂してしまうということが繰り返して行われている。政治家だけが浮いた存在になっているのが本当に恥ずかしい。

② 政治は、歴史に対する敬意

政治家はよく『将来にツケを残さない』と耳に聞こえのよい言葉を口にする。これは、利権政治や金銭ばら撒き政治に対して、私は現在だけではなく将来のこともしっかり考えているよというアピールで使われるフレーズだ（という私も選挙で使っているが）。ただ、これは単純に現在の財政指数をよくするためにだけ金銭的に量られるものではなく、将来を考え抜いたときには現在の財政出動を行うこともあり得るわけで、単純に現在の財政指数を向上するためだけに使われた薄っぺらなものであつてはならない。

『将来にツケを残さない』この言葉には抜け落ちている考えがある。もつとも大切だと感じていることだが、それは『歴史に対する敬意』だ。『歴史』は未来の羅針盤ということが出来る。歴史、とりわけ先人がこれまで積み上げてこられた経験に裏打ちされた知恵や魂に耳を傾けると、おのずとこれから取組むべき答えが見えてくる。

政治家はあまり語らないが、現在・将来・過去を見据えて政治に取組む必要があるのだ。過去の人々がどの様な想いを持つてこのまちや国を発展させてきたのかという視点が抜け落ちていることも政

治が住民から離れてしまっている一因だと感じる。

東北のまちには「これより下に家を建てるな」という石碑があつたという。この先人の想いを汲み取っていれば違ったまちづくりもできたのではないだろうか。

③ 議員に序列はない

政治の世界、特に政党においては、国会議員↓府県会議員↓市町村会議員の順で序列ができ上がっている。国会議員の選挙になると府県会議員と市町村会議員が集票役として奔走し、その中で上昇意欲の強い議員が次のステップを虎視眈々と狙っているという構図が現在の日本の政界に多い一般的な例だ。



茨木市議会での著者 福丸孝之

この序列は全くの間違いである。市町村会議員には、基礎自治体として国会議員とは違った仕事がある。私が市議会議員を務めている大阪府茨木市においては八〇〇以上の事務事業がある。その中には、国や府から委託された事業もあるが、国会とは違った地域特有の課題もある。これらをしっかり議論していく地域にとって最善の施策を展開することが一にも二にも重要なことである。国や府の下請けとは全く違うものなのだ。国には国の課題があり、府県には府県の課題があり、市には市の課

題があり、ステージの大きさが違うだけで取組んでいる仕事の質に変わりはない。序列ができるのは、政治が如何に選挙に当選するか考えられていない証である。

各々の議員に共通している役割は、住民の声をしっかりと拾い上げて民意を引出し、議会において議論を重ねた上で、その民意を政策として提案していくことである。

④ 議論なき議会

マスコミの報道を通じて国会において政策の議論がなされず、自分たちの選挙の都合で反対や賛成を繰り返しているような姿を目にする。

議会は、議員同士が議論を重ねる場である。議論とは、少数意見も尊重して実行され、全ての意見が出し尽くされるまで徹底して行われるべきものである。しかし、実際の現場はそうなっていない。国会では聞きなれた与党と野党という言葉で地方議会でもよく耳にする。地方議会においては、共産党だけが野党で、その他の会派は全ての政党や会派が集まって与党会派と名乗る。与党会派だから市長部局から提出された案件には議会で議論したり、反対したりしてはいけないという暗黙の空気感が充満して、十分な議論がなされることなく案件が成立していくという流れが大方の議会である。

私は、地方議会に与党や野党といった枠組みは必要ないと感じている。ひとつひとつのまちの課題に対して議員同士が是々非々で議論を行うことでそのまちに合った解決策が見つかるのだ。

議会とは、議論の会所。会議とは、会して議し、議して決し、決して行うことである。

⑤ 多数知

民意の引き出し方（議論の仕方）、民意のまとめ方（政策立案）、政策の提示の仕方がとても大切であるが、議論のない議会では、数の論理によって決定されていく。

数の論理（＝多数決）だと本当に正しいことが導き出されない危険がある。

「多数知」とは全ての人の意見を集約して議論し、その中から最善の決定を行う仕組みである。全ての人が議論に参加して意見を述べるので少数の意見であっても納得のいくものであればそれが採用されるのである。

ムラ型とマチ型を区別して考える必要がある。

ムラ型とは仕事と生活が一致している地域でありかつての村がイメージされる。マチ型は、職と生活が分割されていてベッタタウンのようなイメージである。

民意の引出し方としては、ムラ型では、村民大会や総大会のような「直接民主」がいい。見山村（現茨木市大字上音羽）では、大植啓治村会議員が寄生虫を撲滅するために改良便所を全村一致で実施させた事例もある。マチ型では、「無作為抽出による討議」による「創発民主」が適している。無作為で人選を行い、政策について何のしがらみもない立場から徹底的に議論してもらおう仕組みである。「市民陪審」「討論型世論調査」「コンセンサス会議」「市民議会」などが世界的に実施されている。

民意のまとめ方としては、ムラ型では、地域の顔になる世話人が中心にまとめ、マチ型では互選で推挙されたものがファシリテーターとしてまとめるのがよい。

政策の提示の仕方としては、現在のようなマニフェストではないけない。政策課題は、変化のスピードの速い現在の時代において四年間の間に変わることはいくらでもある。例えば、もつと本質的に市民一人ひとりが個人的エゴではなく、公のために幸いと感じることができるものをまとめた「みんなの幸いリスト」のようなものを作成したらよい。

⑥ なって欲しい人を選ぶ仕組み ― 選挙によらない住民代表の推挙

現在の選挙制度においては、議員になって欲しい人が選ばれる仕組みではない。どうすればなつて欲しい人を選ぶことができるのか。

立候補制をやめて互選制にしてはどうかと思う。

「もつと厚かましく前に出ていかなアカン！」とたまにご指導をいただくことがある。政治家は厚かましいという印象が強いのだろう。自分の主義主張を前面に押し出し、数の論理で意見を通すことが素晴らしい政治だとは思わない。

地域の名士として尊敬されている方が沢山いる。そんな方を想像して欲しい。控えめで皆の意見をよく聞く、面倒見がよい、分け隔てがない、過去からのムラの知恵をよく知っている、意思決定は迅速に行うなどのイメージが浮かんでくる。この様な方に政治家になつてもらえば、もつと政治

はよくならないか。私は、政治改革は政治家改革であるとずっと訴えている。政治家が皆から尊敬されるようになって初めて住民が納得できる政治を行うことができるのである。

そこで、現在の自治会を基本とした仕組みを構築してはどうか（自治会にこだわる訳ではないが地域に密着という意味で一番近い組織なので）。茨木市では五〇三の単位自治会と三〇の連合自治会がある。単純平均すると一つの連合自治会に約一七の単位自治会となる。その中から一名の代表を選び、その人物を市議会議員（町会や村会議員）として任命する。そして議員として任命された人物は地域の住民の話し合いのコーディネーターとしての役割を担うこととする。その中から首長や府議会議員を選び、また国会議員もその延長線上で選挙区の中から代表を選ぶこととする。そうするとなりたがりやの人は代表にはなれず皆がなつて欲しい人が代表になる。選んだ方も選ばれた方も責任感を持つて、住民の声をしっかりと反映する首長や議会議員として活躍することができる。

この場合、ムラ型とマチ型があることを意識しておかなければならない。ムラ型とは、生活と仕事と課題が共有できる共同体であり、長老、組長など、みんなが納得して自然に決まる仕組みが存在している。マチ型は、政策課題などは共有できるが、生活や仕事は持ち込むことのできない共同体のことだ。都市によっては、ムラ型とマチ型を併用させることが必要である。地域割りと政策課題割りを混合した形で人選を行うことである。

⑦ 政策の執行・監視

○現在の東京一極集中を改め、地方分権を行う。

四七都道府県を二三の自給都市圏に変える（廃県置圏）。三〇〇の藩を四七都道府県に統廃合するのに一八年かけて行つた廃藩置県の知恵に学ぶ必要がある。

○地方自治の根幹は財源である。

国に財源が集中し、地方自治体が国や都道府県からの交付金や補助金で運営する方式を変える。自給都市圏である地方自治体に財源を集約する。地方税・贈与税は当然のこととして、所得税・法人税・消費税・さらには食の自給で提案されている「租」を地方自治体の財源に充てる。

○国、自給都市圏、地方、ふるさと（共同体）の役割分担を仕分けする必要がある。

*国は、安全保障、防衛、外交に特化する（省庁毎に整理が必要）。

*自給都市圏に道路、河川、教育、福祉、環境、産業の権限を移譲し、そこで調整できない事項だけ国が関与するように制度をあらためる。

*ふるさと（共同体）は、現在行政が実施しているもので、地域で実施できる事業は地域で行う。

○政策の執行体制は、行政職の役人と、住民（NPO法人を含めて）のワークシェアリングを組み合わせる。ワークシェアリングというのは、簡単にいうと少ない仕事をみんなで分け合うという仕組みである。

*行政における仕事を徹底的に地域で分業し、権力を要する業務のみ行政が担う。

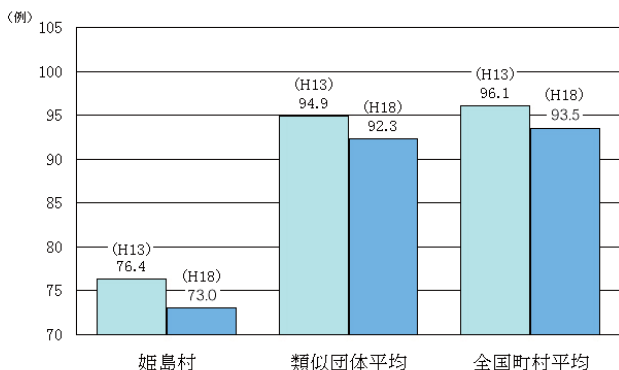
＊それ以外の業務は地域協議会など概ね小学校区を単位とした自治組織により事業を受け持つこととする。そうすれば、住民と行政との相互理解が推進され、よい形での分業が進むこととなる。

大分県姫島村のワークシェアリングはオランダと並んで先進事例である。姫島村は人口二、五一九人に対して、役場の職員が一九一人、職員一人当たり人口は一三人である。

職員の七〇％は現場である。診療所三四人、フェリー三三人、高齢者生活福祉センター二八人、保育所一人、清掃センター六人、幼稚園五人、簡易水道四人、給食センター四人、浄化センター二人、合計一三四人が現場職員である。村長部局は教育委員会の九人を含めて五七人である。副村長と収入役はいない。

これは離島という条件下で、地場産業の振興と雇用確保しかないという課題に応えたものである。沿

(3) ラスバイレス指数の状況(各年4月1日現在)



(注) 1 ラスバイレス指数とは、国家公務員の給与水準を100とした場合の地方公務員の給与水準を示す指数である。
2 類似団体平均とは、人口規模、産業構造が類似している団体のラスバイレス指数を単純平均したものである。

「選ぶ」って何だろう

多くの民主主義国が問題を解決できなくなっている。主権者が投票を重ね、政権党や指導者を代えても、格差は広がり原発の将来は決まらない。民主主義はなぜ壊れているのか。「選ぶ」ことについての寓話のような話から考え始めたい。

50年以上にわたって村長選で投票がない島がある。瀬戸内海の西端に浮かぶ大分県壱岐村。人口2200人。漁業が主産業の村は、1955年の村長選を最後に、15回連続で村長の無投票当選が続く。

島へは国東半島からフェリーに乗る。20代らしい船員の胸に「船舶課」とあるのに気づくだろう。彼らは村職員だ。

港から直進して唯一の信号を左に折れると、福祉施設「壱岐苑」に着く。介護士など43人の大半は村職員で、40人が女性。15人が子育て中だ。大海くりこさん(33)は3児の母。週3日は働き、給料は通常の3分の2。「お給料は家計の足し。生活はその分楽になる」

「行政ワークシェアリング」。40年以上前、若者の流出に頭を痛めた藤本熊雄・前村長が「役場の給料を抑えて、その分多くの若者を雇う」と決めた。いまでは島民11人に1人が村職員で、同じ規模の自治体の4倍以上。

壱岐は「平成の大合併」を拒否する。「他の自治体並みの給料を払えば、職員数を維持できない」と藤本昭夫村長(68)。ちなみに現村長は前村長の長男で、無投票で引き継いだ。

村の貯金にあたる基金は、2010年度で一般会計予算を上回る22億8千万円ある。職員の給与水準は全国最低。役場は公民館を改築して使う。役場発の文書は職員が直接届けて節約に努める。早くから「予防医療」に力を入れた。1人当たりの医療費は県内の自治体で最低だ。唯一の診療所には医師3人と歯科医師1人が常駐する。

役場から15分ほど行くと車エビ養殖場があ



選ばれて背負うもの

「選ばれる」とはどういうことだろうか。アイドルグループ「AKB48」のファン投票による「総選挙」で昨年、1位に選ばれた前田敦子さん(20)はこういう。

「(プロデューサーに)センター(中央)で歌えと言われても、どうして自分なんだろう、と不安があった。でもファンに選んでもらって、ここにいていいんだと思えた」。選挙だからこそ得られる正当性。ファンが決めて何かを背負うのなら、それは素直にうれい!」——3面に続く

り、約30人が働く。昭和30年代に村主導で始まった。運営会社の撤退など危機に陥るたびに「潰れたら島も潰れる」と村が支えた。

無投票で首長が決まるようでは、民主的ではない。朝日新聞もそうした趣旨の記事を書いてきた。藤本村長はこう問い返してきた。「民主主義に選挙は必要だけれど、現実には選挙のための政治になっていないでしようか」

選挙のたびに村長が代われば、行政ワークシェアリングは実現したか。合併を退け、予防医療を重視し、車エビ養殖を支えることはできたのか。11月、現村長の任期が終わる。あなたが島を訪ねたら、「それでも選挙で村長を選ばなきゃ」と言うだろうか。(石松恒)

▶ 2・3面＝世界の街頭を「占拠せよ」
9面＝NYデモの仕掛け人

岸漁業と車海老の養殖に注力し、最大の雇用先である役場へ給与を抑えて職員を増やすという政策をとってきた。職員の給与は夕張に次ぎ全国で二番目に低い。ラスパイレス指数は七・一・六である。ふるさとで職を持つことの方がはるかにありがたいといい、職員の給与に対する不満は殆どない。昭和四〇年代から取組み、過疎化・人口減に対する成果は高く評価できる。

○政治家には選挙という住民から選ばれる制度があるが、公務員や学校の教員などには住民から選ばれる仕組みがない。公職につくものには一定の評価が必要である。例えば、互選制など一〇人からの推薦があり、且つ議会の承認を経ることとし、また四年程度毎に継続審査を実施してはどうだろうか。そうすれば、無責任で不適格な公務員や学校の教員は生まれまいだろう。

⑧ 人間・生活教育

政治の質は住民の資質と代表者の能力で決まる。欧米型のリーダー学はいらない。日本型のファシリテーター的な中心となる人物育成が求められている。すべての人間に人として自然に即して人生を営むことのできる共通の人間・生活教育が必要である。

それは、人間の本質を知り、生活に必要な技術を、自分で覚える人類史の物語教育である。

第一は、生活共同体における人間の役割を覚える「歴史」（理科・物理・数学・社会・芸術・宗教・思想を統合）。世界の歴史を俯瞰的に捉えることができる「文明法則史学」、日本が封印してきた「部

落史」「女性史」「地方史（郷土史）」も取り入れる。

第二は、身体を通じて心のあり方を覚える“体育”（心が崩れても身体が支える教育）。「立つ」、「歩く」、「座る」、「呼吸する」、「挨拶する」の正統を覚える。「礼と作法」を身につける。

第三は、読む・書く・聞く・話す日本語の正統を覚える“国語”（物事の本質を考えるのは母国語であるという教育）。「考える」ということを考える。世田谷区では「日本語」という教科を実施している。

⑨ 減災・免災立法

○危機管理手法の法制化

＊被災者のふるさと（共同体）単位の過疎地入植支援

生活共同体としてのまとまりを維持しないと助け合いの精神が崩れてしまう。

＊被災者に対する復興職務給と基礎所得保障・社会保障などを考える必要がある。例えば、瓦礫処理などは国が一元管理して職を失った人を優先して雇用すればよい。

＊広域災害における司令塔指名、情報一元化が必要である。

＊マスメディアの地域・情報などの分担制

同じ状況ばかりを報道するのではなく、大規模災害の場合は都道府県や地域ごとに民放のエリア担当を決めるようにする。

＊消防・警察・自衛隊に対する人命救助を優先した法整備が必要である。

＊神社仏閣を含む指定避難所の再構成。

指定避難所は地図上で線引きしているので実際に避難しやすいかどうかとはマッチしていないケースも多い。実際の収容人数、昼間・夜間、民間の建物、神社仏閣も考慮にいれて避難所を設定し直す必要がある。

＊住民においては、避難所が何処か理解できていないケースも多い。実際の避難所へ避難する訓練を実施する必要がある。訓練により、地域住民との触れ合いを促進することもできる。

○免災基準の法制化

＊天災域居住禁止

過去に津波に襲われた地域に住宅を建てることを禁止する。

＊天災史教育の推進

その地方で過去に起こった災害がどのような状況であったかをまとめた記録を資料として残さなければならない。対応策や避難経路などの共通認識を図る。

⑩ 規制立法

○報道基準の法制化

＊災害時にとってつけた美談・被災者を落胆させる「がんばろう」報道の禁止。

＊政府・自治体・専門家・巨大企業の横流し報道の禁止。
○専門家偏重規制の法制化

＊専門家・統合家（ゼネラリスト）・住民同席の原則。
＊専門家偏重の諮問会議の禁止。



七、經濟の自給——三つの經濟——



經濟とは、国語辞典によると「国を治め人民の生活苦を救う」とある。また、社会生活を営むための「物の生産・売買・消費などの活動」ともいわれる。

經濟の元々の意味は「經世済民」である。これも世を治め、民を救うということになっている。

① 經世済民

經世済民とは、まさに政治そのものである。政治は正しく治めるということ。ならば、經濟は貨幣のことだけではない。国民の生活を保障することである。經濟には元々金を含めてだが、それ以外の国民の生活を保障するもつとほかの何かが含まれている。

生活とは生命を活かすこと。生命を活かすにはたくさんの機能が必要で、少なくとも一四はある（「ライフ・プランニング」・三井信託銀行編）。

まず、「着る」・「食べる」・「住む」・「健康に生きる」・「動く」、

さらに、「遊ぶ」・「育てる」・「知る」・「つきあう」、

そして、「働く」・「納める」・「備える」・「貯める」・「借りる」である。

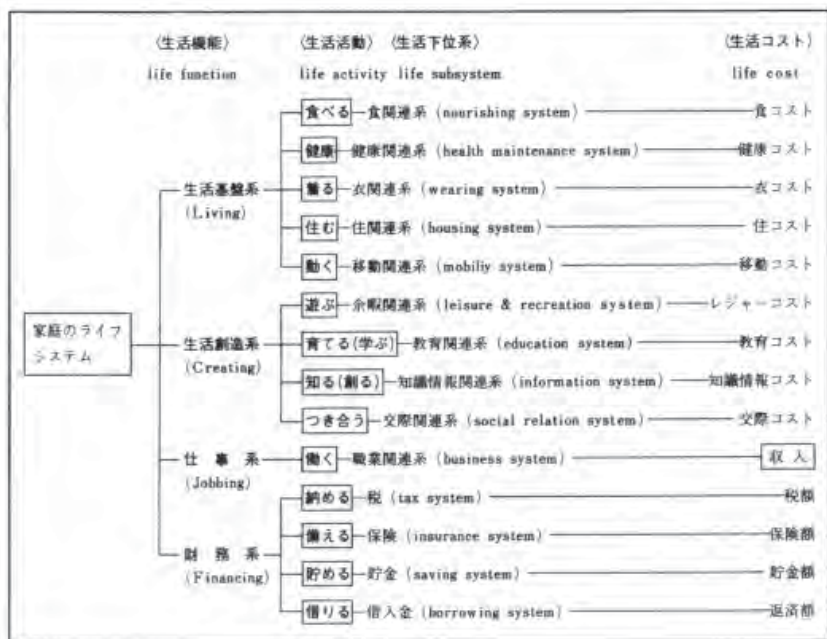
生活の保障というのは、この一四の生活機能を安定させることである。見ての通り、これは金だけではすまない。

国や地方自治体がこのすべてについて国民一人一人にそれを保障するなんて到底できない。顔の見えるもっと小さな規模でしか対応できない。

② 経済を実現する前提は生活共同体である。

生活共同体は顔の見える範囲である。人には苗字と名前があるが、名前で呼び合う範囲である。日本では昭和四〇（一九六五）年までのムラである。

生活を保障するということは、このような規模でしかできない。それはこの規模なら一人一人がわかり合っていて、一人一人が自分の役割を自覚できるからである。既



に触れたように、近所つきあい・買物・散歩の範囲の“地区”が基本になる。ふるさと共同体である。ふるさと共同体を1時間圏の通勤・通学圏としてまとめれば“地域”となり、二〜三時間圏に広がって“都市圏”となり、人口二〇〇〜五〇〇万人でくくると“地方圏”、つまり、自給都市圏ということになる。

マチにも共同体はある。使命に賛同する者の共同体である。しかし、ここでは生活や労働は持ち込まれない。だから、使命共同体には社会全体を変える力がない。

経済は規模が大きくなる程、一人一人の国民の経世済民から遠くなる。やれグローバルゼーションだの、ネットワークだの、分業だの、そうなければなるほど一人一人は消えてしまう。全体の国民総生産や平均でしか語られない。

③ 経済の原理は拡大再生産ではない。
生活共同体の経済はゼロベースである。現状維持なのである。

経済を拡大再生産と考えれば、毎年成長することが必要になる。毎年成長しなければならいなんて所詮無理なことだ。例えば、年に5%の成長を見込むと、一〇年で一五五%、一・五倍である。一六年で二〇七%、二倍を超えるわけである。こんなことはありえない。一時的にあっても、続く筈がない。

日常生活は連綿と繰り返す。毎年増え続けることはありえない。

經濟が成長を原理にしたために、規模を広げるといふ誤魔化しが採用された。生活共同体では不斷の成長は見込めないから、これを市町村に広げ、都道府県に広げ、国にまで広げた。国でも限界があるので世界に広げた。こうすれば各国の成長に格差はあつても、全体として成長を探することができる。

さらに、成長はプラスだけではない、マイナスもあることにする。つまり、借金にも金利をつけて優劣をつければ、借金も貨幣の動きだから成長に計算できる。ネットワークやグローバルイズムや分業というのはこういうカラクリになっている。

經濟の原理は小規模・分散・自給・知足である。大規模・集中は自給と知足を否定し、人間をバラバラにし、生活から離れる。小規模・分散で自立を完結しなければならない。例えば、江戸時代の幕藩体制は石高で經濟を示していたが、総石高三、〇〇〇万石、幕府は四〇〇万石、大名が二、二五〇万石だった。幕府は二三%の石高で運営され、大名は七五%の石高で運営されていた。幕府を政府、大名を地方自治体と置き換えれば、政府も地方自治体も、小規模・分散の經濟で自立していたといえる。

小規模・分散・自立の經濟を支える法則はおそらく「自律分散制御」ではないかと思う。自律分散制御というのは、例えば、蟻にみられる。蟻は無数の群れが整然と列をなして餌を運び、巣を営んでいる。リーダーはいないのに、すぐ近くにいる蟻同士が相互にコミュニケーションして行動している。それは蟻が道標フェロモンを残しながら歩くからである。一匹一匹の蟻がこの道標フェロモンを残して歩くので列は乱れない。その結果、蟻全体としてみると優れた搬送システムや営巣シ



システムができ上がっている。

また、小魚が大きな群れをつくって回遊する例にも自律分散制御の法則が働いている。一匹一匹の小魚は近すぎると泳ぎにくいし、離れすぎると群れから脱落して大きな魚の餌食になる。ここでは小魚同士の間には短距離が働いていて、群れ全体が大魚を擬似して種の保存を果たしている。

このように自律分散制御は、無数の個体が広い範囲に分散していても、個体同士が同じルールでコミュニケーションできれば、すべての個体が同じ状況になるように同時並行的に動いて、全体としては高度なシステムを機能させることができる。

経済はまさに自立分散制御を法則として機能するシステムである。

社会主義の計画経済は、膨大な情報の交換ができず、生産と消費の適切な均衡がとれずに破綻した。自由主義の自律経済も、大量生産・大量消費・無限の成長の均衡を図れず、今や計画経済と同じ状況にある。個人・家庭・私企業・官公庁・国家というように主体が複雑に絡み、生産と消費と流通の膨大な情報を集中管理できないでいる。さらに、国際的な力関係の激変にふりまわされている。

破綻寸前である。

経済における「蟻の道標フェロモン」、「小魚の短距離」という「共通のルール」は何か？ 人間社会にはこの共通のルールはあるのだろうか？

われわれは、それを「ふるさと共同体における三つの経済」だと考えている。経済の依って立つ原単位はふるさと共同体であり、経済とは三つの経済の均衡体である。

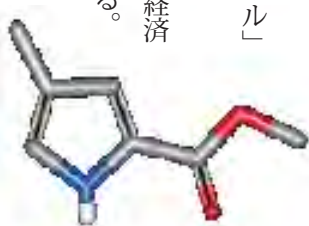
④ 三つの経済

ふるさと共同体の経済は貨幣だけではない。顔が見えて、一人一人が役割を自覚している共同体だから、世を治め人を救う働きは多様になる。少なくとも三つある。しかもそれは均衡体でなければならぬ。三つでひとつということである。

第一は、自給自足の経済である。

自給自足とは、自分で作れるものは作って使うこと。そして、自然の恵みは感謝していただくということ。

しかし、自給自足はすべてに及ばない。家族や個人にとっては得手不得手があり、自給自足の範囲はそれぞれ違う。生活共同体ではこの得手不得手がみなわかつている。そこで、相手が持っていないものを贈与するという習慣が自然発生する。一度贈与があると、七回ぐらい往復する。お互い



ハキリアリの道標フェロモン

に持っていないものが行き交う。自給自足の補完である。時に物々交換にも発展する。この物々交換は等価交換ではない。ここでは物は動くが貨幣は動かない。

自給自足は、それ自体が経済であるが、贈与という経済が派生する。

第二は、助け合いの経済である。

自給自足を前提とした生活は、家族や個人の能力を越えたり、家族や個人では時間がかかり過ぎる領域がある。田植えや稲刈り、山仕事や道路の普請、それに風水害などである。住宅の建設もそうである。これらを共同で助け合う「結」や「講」があった。

「結」は結び借りを結返しする風習があり、これは等価交換であった。馬を一日借りれば馬を一日貸して借りを返した。

「講」にもいろいろあるが、共同購入するものの貯蓄であったり、旅行の積立であったりした。結や講の助け合いでは物も貨幣も能力も動いた。

第三は、交換財としての貨幣の経済である。

自給できないものや物々交換ができないものには金がある。金が必要とき人々は金を稼ぎにマチへ出た。

マチへ金を稼ぎに行く前に、「講」という仕組みもあった。講は元々門徒集団が定期的に集うもので、

神社仏閣への参詣を代参してもらいお札を土産に持ち帰ってもらうものに代表される。それが金銭的に困った人を助ける頼母子講とか、無尽講に発展した。

頼母子講は最初は金で困っている人にお金を無償で提供し、二回目からは利子を取るようなものだった。

講はその参加者が一定の掛け金を出す。決まった日に金を必要とする人が申込をして、抽選が入札で、金の必要な人に金を融通する。金を借りた人は次回から掛け金に利息を加えて払う。

これが頼母子講の原型であり、鎌倉時代からあった。次第に規約ができ、担保も取るようになった。頼母子講は江戸時代の最盛期を経て、大正時代には無尽業法なる法律ができている。さらに企業化が進み、やがて相互銀行へと発展した。

このように、ムラという生活共同体が機能していた時代にはすべてが金で賄われていたわけではなかった。金は必要な人に融通され、それでもダメならマチへ稼ぎに出た。その意味で、自給自足と助け合いと交換財としての貨幣がほどよく均衡していた。貨幣が貨幣を呼ぶ経済は、ここにはなかった。

ふるさと共同体の法則は共同体自治である。

ふるさと共同体は誰にも依存しない。市町村、都道府県、国に任せて、依存しない。補助金や交付金に期待しない。独占企業にも依存しない。そして、市場経済にも依存しない。

すべてについて、自らが自分の意思で参加し、自分で考えて決め、リスクがあっても自ら負う。食もエネルギーも、政治も経済も、自給し、自律する。だから、ふるさと共同体は政府そのものである。王国である。

⑤ 資本主義

資本主義は、生活共同体と市場を分断した。三つの経済から貨幣だけを切り離した。貨幣が貨幣を増殖する市場を別個に生み出した。

日本では昭和四〇（一九六五）年を境に無縁と合理の原理で動く資本主義が始動した。資本主義は大量生産と大量消費によって成長を維持するために有限の資源を無限に使う。自然破壊が止まらない。三つの経済は一つになった。なんでも金があるをいう。人々は金があれば何でもできると思うようになった。

市場は最初に貨幣がある。それを資本に投資する。投資を受けて生産が行われる。商品が流通されて増殖した貨幣が得られる。市場は貨幣が貨幣を生む仕組みであり、投機である。投機の善悪は不問にされる。市場には文化が内在しないので、悪の投機を修正することができない。

生活共同体を再構築し、三つの経済を取り戻さなければならない。文化の内在する経済でなければ市場には悪が蔓延する。

⑥ 自給企業

貨幣だけの増殖を目的とする企業は否定しなければならない。

生活共同体の三つの経済を実現する企業だけを受け容れる。このような企業は自給企業でなければならない。

自給企業は少なくとも次の要件を満たさなければならない。

第一に、自給企業には確かな理念が必要である。

理念は何を最高とするかという根本の考え方である。恐らく、自給企業の理念は個人の「幸せ」ではなく、みんなの「幸い」につながるものでなければならない。個人の幸せはみんなの幸いの中にあるからである。

第二に、理念を実現する基本構想をもたなければならない。

基本構想は原型である。服を作るときの型紙のようなものである。基本構想は能力や状況に応じて複数の脚本になる。そして、そこには計画・実行・点検と、脚本の変更という作業が組み込まれる。

第三に、最終到達点を明記しなければならない。

最終到達点は、最後に何をもたらずか、どんな状況を実現するかということである。売上高や利益ではない。日本一とか、世界一ということでもない。みんなの幸いそのものである筈だ。それは多分、不易を大事にすることである。そして足るを知ることである。

不易とは、過去・現在・未来を通じて変わらないこと。いかに時代が変化しても共通して大事なこと。人類にとつての不易とは何か？

○自然の恵みを受ける生活・・・水、土、光、大気、動植物、鉱物の全体性と循環

○農林漁業の一次産業

○共同体・・・家族、地域、課題や使命による共同体

○暮らしを営む仕事・・・家事、山仕事、畑仕事、道普請、助け合い、祭など

○手仕事・・・手仕事によるものづくりと技

足るを知るとは、不用不急の欲を持たないこと。あらゆるものを受け容れ、むさぼらないこと。

自給企業は理念と最終到達点に照らして、最初に最後を決めておかねばならない。企業としての役割が終わったら、企業として生活共同体から否定されたら、その時に企業を閉じる計画を持つことである。

第四に、成長を悪とすること。

不順の成長は初めから無謀なこと。現状維持さえ至難の業である。ゼロベースの企業運営が至高である。生活共同体を支えるにはゼロベースが必須の条件となる。成長は生活共同体を否定することと直結する。

第五に、一〇〇年企業を目指すこと。

大型ショッピング・センターは三年で停滯する。本業を貫き一〇〇年継続できる企業は稀有である。しかし、京都の老舗には一〇〇年企業が多い。その真因は生活共同体との密着である。経営者が代替わりしても、顧客が代替わりしても、関係は不変だからである。

「自給企業に関連する法と制度」

○大企業・宗教法人の優遇税制の撤廃。

○銀行などの金融機関に対するテコ入れの廃止。

○地下・海岸線・一級河川・山岳地帯の国有化。

○自給都市圏ごとに動物センターを設置する。

動物に関するあらゆる機能とそれを担う陣容を一堂に集結する。

○国債の発行を禁止する。

負債に金利をつけ、格付けを行い、取引をすることを全面的に禁止する。

八、エネルギーの自給

五知

エネルギーは仕事をする能力の量である。かつては水・風・木・石炭・石油・地熱・天然ガス・動物など自然にある資源・物質そのものをエネルギーとして使った。しかし、現代では自然以外の資源・物質も含めて、それらを電気に変換し、エネルギーとして使っている。電力が主なエネルギーである。今、問題になっているのはどんな資源・物質を電力に変換するかということである。

① 電力資源の構成

一九九三（平成六）年の日本の年間発電量は七、九五七億kw hであるが、その資源構成は次のとおりである（資源エネルギー庁資料）。

原子力	三一・二%
水力	一二・三%
石油	一九・一%
石炭	一二・〇%
液化天然ガス	二二・二%

その他

三・二%

原子力が三一%を占めている。

自然エネルギーについては、風力・太陽光・バイオマス（木質燃料など）・小型水力・地熱を合わせて一%、大型水力（ダム）が八%、合計で九%である。

② 電力需要の構成

二〇〇七（平成一九）年度の総需要電力量、三八八・八億kw hの構成は次のようになっている。

自家発電

一六・五%（産業用六、一九四 業務用二三九億kw h）

特定規模需要

四七・二%

電力

五・九%

電灯

三〇・三%

自家発電は、一、〇〇〇kw以上の事業所が対象。これが一七%を占めている。

特定規模需要は、契約電力が五〇kw以上の電気事業者（ただしその一部）および契約電力が二、〇〇〇kw以上の電気事業者の需要。

電力は、大手の電力会社あるいは特定規模電気事業者が供給するエネルギー量。
電灯は、いわゆる家庭用需要。これは三〇%になっている。

③ エネルギー自給の原理

第一に、原発の是非は自然の摂理から判定しなければならない。

「代替エネルギーの提案なしに原発廃止を言うな」という意見が大勢を占めているが、これは間違っている。原発がなければ行政も生活も成り立たないから原発は必要だという理屈である。金が生命に優先するということになる。

自然の摂理は、循環と全体観と直観である。放射性廃棄物は数万年たっても処理できず、地球上で循環しない。放射性物質は地球という自然界でほかのすべての要素と全くなじまない異物である。太陽圏の物質が地球圏で役に立つ筈はなく、直観的に間違っている。

第二に、エネルギーは不用不急には使わないという鉄則を持たなければならない。

省エネや節電で電力需要を抑える前に、不用不急にエネルギーを使わない社会の鉄則が絶対条件である。不用不急が最も無駄なエネルギー消費である。生活からも産業からも不用不急を排除することを鉄則としなければならない。自動販売機、店舗の外壁照明などは全廃していい。

第三に、エネルギーは小規模・分散で自給すべきものである。

電気は大量に蓄積できないし、需要と供給をこまめに合わせるべきものである。特に、自然エネルギーは分散型である。地域ごとに、自然の条件が違うから当然である。

発電と送電を分離し、周波数を統一して、分散発電・広域送電を進めなければならない。電力会社の地域独占は排除しなければならない。自由化すべきである。

第四に、エネルギーには共同体自治が必要である。

エネルギーについて政府や電力会社に任せてはいけない。国民が自ら引き受けて考えなければならない。リスクも自ら負う。すでにヨーロッパには「エネルギーの共同体自治」がある。

④ 原発全廃

○原発は自然の摂理に反する故全廃すべきものである。存在そのものが生命を否定するエネルギーはあつてはいけない。全廃まで政府が管理すべきである。

○原発を全廃しても、電気は余るし、電気代も下がるという主張がある（齋藤進・朝日新聞 二〇一一・六・一一）。その根拠はこうだ。

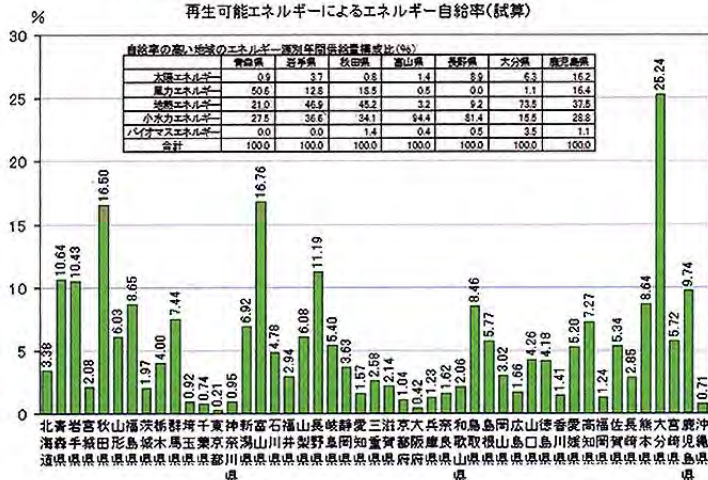
日本の発電能力は、原子力一／水力一／火力四。

操業率は、原子力五〇％／水力一〇〇％／火力五〇％。

原子力の操業率が一〇〇％だとしても、火力の操業率を七〇％にすれば、原子力は全廃できる。電力需要の二〇％は自家発電で、その内九〇％が火力、一〇％が水力だから、電気代が上が

都道府県別自然エネルギー自給率(2008年)

再生可能エネルギーによるエネルギー自給率(試算)



るわけがない。

○原発は電力の三〇%。その寿命は四〇年。今後原発を新設せずに、四〇年で順次止めると二〇五〇年にはゼロになるという主張もある（朝日新聞二〇一七・一三社説）。

○原発は太陽がその内部で行っている核反応からエネルギーを取り出す技術である。しかも、それを空間的距離の媒介もなく地球に直接持ち込む。

原子核の融合や分裂は地球圏の内部では起こらない。地球圏は直接・無媒介な太陽的プロセスとの接触を否定して成り立っている。だから、原発による事故は地球圏の力で修復することとはできない。

それに対して、地球圏の直下で起こる地殻

の振動やその損傷は、地球圏自らの力で修復できる。原発は原理的に地球になじまない（中沢新一著「日本の大転換」より要約）。

⑤ 自然エネルギー

自然エネルギーがあまり伸びていない理由は、それが地域的で分散しており、大量生産に向かないからである。自然エネルギーは大量生産・大量消費には適していない。生活共同体くらいの規模に向いている。

自然エネルギーは今のところ開発途上である。政府と電力会社が御用学者の意見を聞いて、非効率と考えているからである。エネルギーの共同体自治を進めるなら、自然エネルギーは明るい。分散発電を行い、需給を細やかにかみ合わせ、電力会社に固定価格で全量を買収させ、広域送電をさせれば極めて有効に機能する。

日本の自然エネルギーは、風力・太陽光・バイオマス・地熱・水力を全部合わせても九%にしかっていない。しかし、世界規模では、二〇五〇年までに最大で世界のエネルギー需要の七七%を自然エネルギーで賄えるという予測がある（気候変動に関する政府間パネル・二〇一一年）。

ここに、公共研究センター・NPO法人環境エネルギー政策研究所「永續地帯二〇〇八年報告書」から都道府県別自然エネルギー自給率（二〇〇八年）の試算を紹介しよう。

自然エネルギー自給率＝自然エネルギー供給量÷エネルギー需要量×一〇〇。

自然エネルギー供給量は、太陽光発電・事業用風力発電・地熱発電・小水力発電（二〇、〇〇〇kw以下）の水路式・バイオマス発電・太陽熱利用・地熱利用（温泉熱利用・地中熱利用）。

エネルギー需要は、民生部門（家庭用・業務用）と農業・水産部門が対象。工場用と自動車用は含まれていない。

自給率の高い地域のエネルギー源を見てわかるように、自然エネルギーは地域によって特徴がある。風力は青森、地熱は大分・岩手・秋田、小水力は富山・長野となっている。まさに分散型である。

○風力は太陽熱によって生じる大気の運動である。日本では最も有力なエネルギー源である。特に、北海道・東北・九州に偏在しているが、原発四〇基分くらいの電力量があるといわれている。一九九〇～二〇一〇年の間に、世界の風力発電量は一〇〇倍以上になった。原発の総設備量の三・七億kwに対して、風力のそれは一・九億kwに達している。

世界で自然エネルギーのトップを走るデンマークのロラン島では、主に風力ですべての電気を賄っている。人口六五、〇〇〇人の島に、六〇〇基の発電用風車が回っている。その半分は個人所有だという。発電した電力はすべて電力会社を買っている。風が吹くだけで収入が増える人もいる。

○地熱は火山国で、国土の三分の二が森という日本で、非常に有力なエネルギーである。地下から取り出す高温の蒸気でタービンを回す地熱発電は有力である。

ほかにも温泉熱や地中熱を利用する発電も可能である。

日本は地熱発電の資源量（二、三四七万kw）で世界三位である。東北六県で約七四万kwの開発可能量があるといわれる。ただ、この資源量の八割が国立公園内にあり、開発が規制されている。それに開発リスクや初期投資が大きいという問題もある。しかし、北海道・東北・九州の計一三地域では新規開発が検討されている。

温泉の熱水で小規模発電を行う温泉発電も、新たに掘削して熱水を得る方法から既存の温泉熱を利用する方向へ進展している。

○水力は山国日本のお家芸といえる。とりわけ、一〇、〇〇〇kw以下の小水力発電は個人による開発も含めて有望である。

データに表れない個人の水力発電は結構多い。例えば、兵庫県朝来市和田山町で自給自足の生活を二〇年以上続けておられる大森昌也さん一家では水力発電で電気の半分以上を賄っている。落差一〇m、ホースで一〇〇m、沢の水を引いている。テレビやパソコンは使えないが、電灯や洗濯機は充分使えるという。

大型ダムによる水力発電は自然破壊につながるが、個人用も含めて小水力発電は本気で開発すべきである。

○太陽光エネルギーによる世界の電力導入量は四千万kwといわれる。日本は二〇一〇年、一五〇〇万kwで、ドイツ・スペインに次いで世界三位である。原発一五基分に相当する。

○沖縄本島から南西三〇〇キロの宮古島では、太陽光と風力で島の電力の三〇%を賄っている。太陽光パネル二二、〇〇〇枚が最大四、〇〇〇kwの電力を生みだし、五基の風力発電機が最大四、二〇〇kwを発電する。人口五五、〇〇〇人の島で、夏場のピーク時には五〇、〇〇〇kwの需要になるが、冬場はその半分だという。

宮古島の南西にある八八世帯の来間島では、太陽光発電と蓄電池だけで電力の全てが賄われている。この蓄電池、太陽光や風力は天気によって左右されやすいので、これを補う装置である。宮古島でも四、〇〇〇kwの蓄電池が採用されている。

宮古島のニュースを世界へ発信「SHINPO NEWS.COM」
http://miyakoshinpo.com

携帯でニュースを身近に「宮古新報モバイル」
http://m.miyakoshinpo.com

1部から気軽に電子購読「新聞オンライン」
http://www.shimbon-online.com



906-0012 沖縄県宮古島市平良西里333-1 TEL 0980-73-1212 FAX 0980-73-1811 宮古新報株式会社

社会・一般 産業・経済 政治・行政 文化・芸能 スポーツ 教育 健康・暮らし 科学・環境 催事・イベント

連載・企画 新製品・新開店 新報特約員 ビジネス.com スポーツ.com 求人情報 SOS宮古島 読者申込 リンク

宮古島から世界へ

地球密着の媒体として
地先の政治・経済・文化・スポーツを
迅速かつ正確に報道。
あなたの読みたいスタイルで
宮古島のニュースにアクセスしよう！

来間島、100%太陽発電

2011-06-25 20時30分配信 産業・経済



宮古島市（下地副市長）は、閉会中の市議会議員定例会の2011年度一般会計補正予算の議決を済ませ、来間島すべての需要電力を再生可能エネルギー（太陽光発電施設）で供給するための基金整備及び保証事業を本格約コストで進める。市主導で同エネルギー普及するための基盤モデルとして位置づけ、推進する方針だ。

同市は11年度当初予算として、来間島スマートコミュニティ構築事業補助事業に1億円を計上。半額の補正では同事業分を1億7521万円としたほか、定置型太陽光発電設備設置補助事業分として2億円を新たに盛り込んだ。

同市企画財政部エコアイランド推進課によると、今回の事業は、再生可能エネルギーを最大限活用する社会システムとしてスマートコミュニティ実現に向けた実証実験を実施し、エネルギーの「地産地消」を推進すること、島外移住の低コストを図るもの。

長期的には、来間島の緑地帯に一般住宅用、それに主目的な電力需要の不足に対応した電圧型太陽光発電システムをそれぞれで設置する。これにより、島内すべての需要電力量が再生可能エネルギーである太陽光発電で供給が可能となる。

「スマートコミュニティ」は、環境配慮型都市（地域）とも呼ばれ、健全性の電力を有効利用することや、再生可能エネルギーの活用、交通システム、住民のライフスタイルの美文化などを総合的に組み合わせた社会システムのこと。同市では来間島モデルとして位置づけ、将来的には市全体に普及するためのスキーム（枠組み、仕組み）を確立したい考えだ。



来間島スマートコミュニティ構築事業として、同市は来間島に再生可能エネルギーを最大限活用する社会システムとして、来間島スマートコミュニティ実現に向けた実証実験を実施し、エネルギーの「地産地消」を推進すること、島外移住の低コストを図るもの。

関連記事

powered by weblio

- 来間島EMSで太陽光（来間島産業課）
- 太陽光発電設備、4年間で10倍増
- 11年度予算6000億円、来間島に太陽光発電設備
- 市、スマートコミュニティ構築事業推進委を設置 委員を募集
- 沖縄、国は来間島に太陽光発電施設建設

<http://miyakoshinpo.com/news.cgi?no=3793&continue=on>



○ほかに、太陽熱、廃熱、廃棄物利用のエネルギーもある。

さらに、バイオマスといわれる植物の体内に蓄積された変換済み太陽エネルギーを燃焼によって取り出す技術もある。熱と発電に使える。

イギリス・スコットランドでは潮流・波力のエネルギーを利用する発電も進んでいる。

自然エネルギーは小規模分散、地域の自然特性を活かして開発することが鉄則である。全量を電力会社が固定価格で買い取り、広域送電するという仕組みが絶対条件である。

⑥ 太陽エネルギー

中沢新一氏は「日本の大転換」なる著書で、第八次エネルギー革命を提唱している。要約して以下にご紹介したい。

それは太陽エネルギーを変換・媒介して地球圏に持ち込むという発想である。

半導体技術を使って、太陽との直接的な対面の中からエネルギーを取り出す。原子核の外殻を回る電子を操作する技術である。その技術の原型は植物の光合成である。植物は光合成によって太陽エネルギーを変換しているが、それを真似た技術を開発する。つまり、植物が酵素の働きによって実現しているエネルギー変換を半導体の働きで実現する。

そしてそれを風力・バイオマス・小水力発電と組み合わせる。

原発は地球圏の内部では起こらない原子核の融合・分裂を媒介なしで地球圏に持ち込み、機能不全を招いている。そしてそのことが資本主義の市場システムを破綻に追い込んだ。

太陽エネルギーを地球圏に媒介的に変換する、太陽エネルギー革命に期待したい。

⑦ 質素な生活

エネルギー問題はそれだけで論じてはいけない。野放図にエネルギーを使っではいけないからである。特に、自然エネルギーは有限だから、使いたいだけ使っていたのでは自然破壊に歯止めがかからない。

極端な話、見てもいないテレビを一日中つけっぱなしにするなんてとんでもないことである。家の中が静かすぎてテレビがついていないと落ち着かないという話をよく聞く。いま、こんな生活がとても多い。

エネルギーは、質素な生活に必要な分だけ使うのが当たり前の生き方にならなければならない。

質素な生活とは何か？

質素というと、禁欲とか、節約とか、貧乏というように思う人々が多い。しかし、質素は実はとても素晴らしい生き方なのである。それは本来の根本のありようという意味である。人間の本来の姿、人間の根本の生き方のことを指している。飾らないありのままの生き方と

いつでもいい。それはどんな生き方なのか？

○まず、人間は生かされている存在だということを体感すること。生かされていると思えば、傲慢ではいられない。謙虚に感謝の気持ちが持てる。そして、生かされている大元に対して自分の役割を感じる。それは、自然であり、ふるさとであり、宇宙であり、文化である。

○生かされている自分の役割は誰かに与えられたり、どこかで決められているものではない。自分自身が感じ取るものである。役割を感得する時期はそれぞれだから、歳をとってからやると自覚する人間も多いだろう。しかし、役割がわかった時が本来の人間になる時である。その時からその役割を一芸として磨けばいい。

○自分の役割を果たすためには心身の健康が不可欠である。健康は何かをするために必要なのであって、健康そのものが目的ではない。心身の健康は風土食によって鍛えられる。地域ごとの自然の恵み、おふくろの味をかみしめていただく。一汁一菜、小食がいい。ごはんと言物に味噌汁とおかず一品、腹六分くらいが健康の必須条件である。このような食が乱れると、心も乱れる。心が乱れると役割は果たせない。

○自給自足を心掛ける。何でもお金で都合する生活はしない。自分でつくれるものは自分でつくる。野草や木の実や魚など自然の恵みは獲りつくさないようにしていただく。自給自足は手仕事で行うので、いつの間にか魂が鍛えられる。例えば、共稼ぎだからといって子供を保育園に預けるのは本当にいいことだろうか？保育園は親の替わりはできない。親が子供の

そばにいないけれども、親がいなくていいことは子供だけでなく親にとってもよくない。子育ては親育ちだから、子育てをしない親は人間としても成長できない。殺伐な心になる。子供も情緒不安になる。子育ては自給自足すべき最たるものである。

○不要不急をなくする。例えば、住宅メーカーは“一部屋三コンセント”などという。本当にこんなに必要なか？ 主照明がひとつあれば、あとはスタンドなど補助照明で充分である。コンセントはひとつで間に合う。同時にいくつもコンセントを使う必要はない。

余ったものは捨てているが、余るほど手に入れる必要はない。マチのゴミ置き場はよくカラスに荒される。人間が食べ残したものをカラスが食べるからである。カラス対策だといって、ネットを張ったり、ネットに重石を置いたりしているが、食べ残さないようにすればいい。残っても捨てなければいい。そうすればネットも重石もいらぬ。

○夕日に逝き、朝日に蘇る。かつて人々は早寝早起きだった。昼夜逆転はなかった。それを“毎日夜に死に、朝に生まれる”のだといって、毎日を大切に生きた。一日一日を一所懸命に生きた。素晴らしい生き方だと思ふ。

○質素な生活というのは、こうしてみると足るを知る生き方である。むさばらない生活である。このような生き方が当たり前になれば、多分いま需要といわれているエネルギー量は半分以下になる筈である。エネルギーを問題にする前に、質素な生活を計画しなければ、本当の解決はみえないと思う。

あとがき

われわれの議論も執筆も、この本が出発点だと思っている。電子図書だから、読者のみなさんの書き込みができる（「この本についてご意見を頂くため「茨木未来倶楽部」の公開フェイスブックのページをつくっています）。それを通じて真摯な議論ができる。この展開はどんどん進化する。それを切望して、「あとがき」にはわれわれの至らない基本構想をまとめておくことにする（左頁参照）。

執筆担当…佐藤眞生（一～四、七～八）、赤松民男（五）、福丸孝之（六）

表紙・各章の書…池田寿村 揮毫

写真…一章～三章 南島幻／四章～八章 赤松民男、佐藤眞生、福丸孝之

その他、Wikipedia等、インターネット上からも著作権フリーの写真を使用させていただきました。ありがとうございました。

フェイスブック：<http://www.facebook.com/ibaraki.mirai>

ホームページ：<http://www.dep-ebooks.org/furusato/>

- 多数知「創発民主」
- 選挙制度廃止・代表推挙制
- 全ての税は地方財源
- 人間・生活教育
- 減災・免災立法
- 偏頗規制立法
- 救急名簿保管義務
(病人・障害者・独居老人など)
- 山岳・海岸線・一級河川・
地下の国有化
- 政党優遇制全廃

政治の自給

- 三つの経済の均衡体
- 小規模・分散・自立経済
- 不易の自給企業
- 百年企業
- 大企業・宗教法人優遇全廃
- 国債禁止立法
- 自給都市圏動物センター
- 自律分散制御

経済の自給

自給都市圏

23 自給都市圏への廃県置圏

- 農地国有化・平成の班田收受
- 里山保全農園
- 有機栽培・自家採種
- おすそわけ市・直売制
- 自給農家ふるさと「結」・「講」
- 手仕事塾
- 風土食義務立法
- 栽培一品・手作り料理一品運動

食の自給

- 共同体自治
- 足るを知る質素な生活
- 太陽・風力・地熱・水力による
地域分散発電
- 余剰買取・蓄電
- 原発即刻全廃
- 周波数統一
- 不用不急電力規制立法

エネルギーの自給

◇ 著者プロフィール ◇



赤松民男

京都府北丹の秘境といわれる「平家の落人の村」に育つ。
少年期「焼畑農業」の経験を持つ。

MOA 自然農法農場「鈴木農園・泉原の郷」の援農耕作に
携わり 16 年目。岡田茂吉氏が創始提唱した自然尊重・自然
順応を基本とする無農薬・無化学肥料の有機農業を行う癒
しと健康のための農場。

MOA 美術文化財団大阪支部推進委員。茨木未来倶楽部会員。

「～人生は真・善・美を極める旅～」



福丸孝之

昭和 46 年生まれ。

思想家である林英臣氏との出会いにより政治の道へ進む。

人とひとの心が繋がり、助け合うことのできる愛が溢れる
社会の実現のために活動。

政治を変えるためには政治家自らが変わらなければいけな
いとの思いから、志ある議員のネットワーク構築を展開中。



佐藤眞生

腹六分、穀菜食中心。日に 2 リットル摂水。週 2 回半日断食。
丹田呼吸。

休耕田 3 反を里山保全契約で耕作。野菜自給 15 年目。

野草てんぷらの実演。野草の採取、下拵え、調理、試食、
後片付け。

月刊対話紙「自然人」、「芸術の森ニュース」発信。

植物との対話エッセイ連載。

百年都市構想の茨木未来倶楽部、未来へ魂と知恵を伝える語り部の伝承塾、
縄文魂を学ぶ縄文直観塾主宰。

マチ型の生活共同体構築を模索中。

ふるさと ー日本生まれ変わりの基本構想ー

初版発行 2012 年 3 月 11 日

著 者 赤松民男
福丸孝之
佐藤真生

発 行 茨木未来倶楽部
本文組版 編集工房 D E P / 桐生敏明

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

© Tamio Akamatsu / Takayuki Fukumaru / Mao Satou
Printed in Japan 2012